

武庫川学院の名称について

—関連資料の収集と整理—

About the Name of Mukogawa Educational Institute

友 田 泰 正*

TOMODA, Yasumasa

目次

- I. 関連資料収集・整理の視点
- II. 「いにしへ」の武庫、武庫川、武庫
の泊・津門、武庫の海
- III. 鳴尾の形成、語源、鳴尾の松、岡
太神社、西宮神社
- IV. シンボルとしての水、川

* 武庫川女子大学教育研究所長、文学部長

武庫川学院の名称について

I 関連資料収集・整理の視点

A はじめに

単に武庫川の近くにあるから、武庫川学院なのか。それとも武庫川およびその周辺の歴史、ひいては川や水一般の特性を辿ることによって、本学院立学の本質に何らかの貢献が期待できるのか。

具体的には武庫川、川あるいは水などと「対話」することを通して、自らの個性や生き方を考える糸口をつかむことができるのではないかと。また、本学院が立地する土地の自然や文化、特にその歴史を紐解くことによって、本学院における教育の理念と機能のより一層の拡充・深化が可能となるのではないかと。

例えば、本学本館入り口正面に掲げられている創立者、公江喜市郎先生の書「水澄 山静 風涛 偕和」とは、どのような情景を指し何を意味するのだろうか。さらに本学学院歌の一番には「おもひは遠し武庫川に、とどめぬあとかほよ鳥」とあるが、「かほよ鳥」とはいつたいどのような鳥なのだろうか。また学院歌の二番には「後の宮のみちからの、異国船のふなつどひ、そのいにしへのにぎはひを、武庫の浦曲にしのびつつ」とあるが、「後の宮」「異国船」「武庫の浦曲」とは具体的に何を指すのか。そして「いにしへのにぎはひ」とは、いつたいどのような賑わいであつたのであろうか。

学校教育の主たる場は、言うまでもなく教室やキャンパスである。しかし、教室やキャンパスでの教育をそれが立地する地域にドッキングし、武庫川のムコとは何か、鳴尾地域のサロオとは何かと言った問いを掘り下げ、そこに根を下ろすことによって、そこからかけがえのない「養分」を吸収し、本学の教育環境をより豊かにすることはできないのだろうか。

以下、関連すると思われる資料を集めて、その可能性を検討するとともに、もしその可能性があるとすれば、そのための資料収集・整理の糸口をつかもうとするものである。その構成は以下の通りである。

- I 関連資料収集・整理の視点
 - A はじめに
 - B 校地、学院名選定の経緯
 - C 「水」の書
 - D 学院広報誌「rivière（リビエール）」
 - E 学院歌の歌詞
- II 「いにしへ」の武庫、武庫川、武庫の泊・津門、武庫の海
 - A 万葉集に詠まれた武庫
 - B 学院歌の「かほよ鳥」「後の宮」「武庫の浦曲」
 - C 武庫の語源、武庫郡、広田神社
 - D 武庫の泊・水門・津・津門の位置と形状
 - E 瀬織津姫
- III 鳴尾の形成、語源、鳴尾の松、岡太神社、西宮神社
 - A 形成
 - B 語源
 - C 和歌に詠まれた鳴尾
 - D 謡曲の鳴尾
 - E 鳴尾の松
 - F 岡太神社
 - G 西宮神社
- IV シンボルとしての水、川
 - A 『方丈記』
 - B 神道の水、山、川、滝、祓い・浄め、神
 - C ヨーロッパ中世の川

B 校地、学院名選定の経緯

大橋敏夫著『風濤に竿さして―荻野八郎伝』（新風書房、二〇〇一年）には、校地の選定に関して昭和一三年六月十日、本学院創立者、公江臺市郎先生に随行した荻野八郎氏の次のような実地見聞の記述がある。

「東西に大阪、神戸を挟んでの田園地帯で発展が予想される場所でもあつて交通の便もJ R、阪急、阪神、阪神国道電車など南北は別として両都を結ぶ交通機関が四線もあつてその点は申し分はない土地で葎畑の外、季節の野菜栽培が青々しく北に六甲の峰を望み、南に茅渚（ちぬ）の海といわれた瀬戸内海、足の便は阪神本線

鳴尾駅から五分、武庫川駅からでも八分、やや西に中国山系を源とする丹波路を経ていにしえは河口に武庫の泊といはれる港として栄えた武庫川の清冽を控え学園設置地域として申し分なき最高の条件をそなえ」（三一頁）ている。（昭和一三年九月二十日、売買契約成立。）

財団名に関しては「公江学院」と「甲子園学園」という提案があつたが、前者は公江高等女学校という校名に繋がり、あたかも公的な教育の場を私物化するかのような印象がぬぐえないこと、そして後者は高校野球の場としては有名であるが男子校のイメージが強いと言う難点があつた。そこで、公江喜市郎先生から荻野八郎氏に相談があり、荻野氏は次のように述べている。

先ず、公江の江は揚子江等の大河の江であり、河川は公のものであるので、公江学院でも良いのではないかと説得を試みるが叶わず、「いつそ武庫川学院でもいいと思いますよ。あの川は我々の出生の地丹波に発し、瀬戸内海に流れ、昔は川下に武庫の泊という港町があり、内海を航行する旅びとには神埼の津とともに要衝の地として歴史的にも知られたところですし。」（八六―八七頁）

このようなやりとりの後、武庫川学院に即決したという。（昭和一三年一二月一日、文部省への設置認可申請。）

以上の経過を見ると、「公江の江は公的な河川・大河を意味すること」、「公江喜市郎出生の地に発し」、「清冽な川」として阪神間を往来する人々の目を楽しませる武庫川が校地の近くに存在すること、さらには「その川の下流に武庫の泊があつたという歴史性」、交通の便等を考慮して校地が選定され、それらが学院名に繋がつたように思える。

武庫川

兵庫県東端、多紀郡の老（おい）の坂峠に発し、青野川・波豆（はず）川など多くの支流を集め、下流で逆瀬川・仁川などを合わせ大阪湾に注ぐ川。長さ六六キロ。六甲山地を縦断する上流に武庫峡の景勝地、中流に宝塚市・武田尾温泉などの観光地があり、下流の三角地は甲子園。（昭和出版研究所編『日本百科大事典』小学館、一九六四年）

C 「水」の書

メモリアルアトリウム（中央キャンパス公江記念館三階）の展示室Ⅰ（校祖室）の壁面に、ご両親の肖像と並んで次の書が掛けられている。

(なお、校祖室で今ひとつ注目されるのは「校歌制定まで」のコーナーである。そこには、作詞者井上赴氏から公江先生に宛てた自筆の手紙と、新旧二つの歌詞のうち旧の歌詞が展示されている。その意味で「校歌」と「水の書」は、学院設立に当たって公江先生が特に重視された二つの要因ではなかったかと推測される。)

水

瑞仙

自ら活動して他を動

かしむるは水なり

常に己の進路を求

めて止まざるは水なり

障害に逢ひて激しく其の勢

力を倍加するは水なり

自ら潔くして他の汚濁を洗ひ

清濁合せ入るるの量あるは水なり



この書は、「公江喜市郎先生の横顔」に寄せた日下晃元学長・副学院長の一文によると、曹洞宗管長の高階龍仙老師の揮毫になるものであり、かつて公江学院長の公室に掲げられていたものである。（『風濤偕に和して―公江喜市郎先生の歩んだ道』公江喜市郎先生叙勲記念会、一九六七年）

曹洞宗は、永平寺・総持寺を総本山とする禅宗の一派である。禅の文化に関しては、鈴木大拙『禅と日本文化』（岩波新書、一九四〇年）、オイゲン・ヘリゲル著、藤原美子訳『無我と無私』（ランダムハウス講談社、二〇〇六年）、森下典子『日は好日』（飛鳥新社、二〇〇二年）参照。

この一文で、日下先生は「この二〇年間、常に学院長の間近にあつて、その激流のうずの中でそれ（公江先生の生きざま）を眺め通して来た」ことを踏まえて、次のように述べておられる。

「学院長が学内にあつては常に自から陣頭に立つて、八面六臂の活躍をして教職員全員を奮い立たせ、これをフルに動かし、学外の諸団体にあつても、何時の間にかその推進力としての役割を担つてその団体を活気ある活動に導くその実行力。

常に数歩先を見透して、どんどん新しい企画を樹て、積極的にこれに立ち向つて行く進取果敢な気性と、目標を見定めたらこれが達成のためあらゆるルートの開拓を試み、その進路を確保して行く熱意。

そして、次々に己の前に立ちほだかる障害に遭遇する毎に、慎重な配慮をめぐらし、満を持して激しくこれに打ち当り、いかなる障害も乗り越えて初志を貫徹せずにはおかないその闘志と努力。

さらには、人をご馳走することは好きだが、招ばれることは嫌い、というような性格、武庫川学院を創立して以来、入学に際して一文の寄附も受付けないというような教育者らしい潔癖をもちながら、しかも他人に対しては、清濁併せ呑むその広い抱擁力。

このように考えて来ると、恐らくは偶然の一致ではあろうが、龍仙老師が、公江学院長の性格を知悉の上、いみじくも水に喩えて描きつくされたかの感をうけるのである。

というのは、老師は、この書で水の本性の中でも、岩を噛み、飛沫を上げて流れる河の水の姿、即ち水の動態を描いている。同じ水でも、千古の謎を秘めて静かに横たわる湖の水の姿、即ち水の静態については触れていないのである。公江学院長は、動く水のもつ測り知れないエネルギー、といったものを感じさせる人である。水の姿の中でも、満々とたたえた水の静けさというタイプではない。また方円の器に従うというような受動的な水の性格とは別のものである。あくまでも能動的に、つき進み、押し流し、あるいは浸透し、曲折があつても遂には大海に注がずんば止まず、というダイナミックな水の迫力を思わせるのである。」（八四四―八四六頁）

『広辞苑』

「水は方円の器に随う」＝【美語教】（「方」は四角、「円」丸で、水が容器によ

ってどんな形にでもなることから）人は交友・環境の如何によつて善悪のいずれにも感化されるの意。

本館正面入口に掲げられた公江先生の書

水澄 山静
風濤 偕和

この書は、学院の理想的教育環境を現すとともに、教職員学生生徒の大和の姿の象徴的表現であり、真の和の精神を体得した社会人を育成するという立学の趣旨を示す。

D 学院広報誌 「rivière (リビエール)」 一九九八年三月第一号発刊

フランス語の川の意。川の流れのように受け継がれていく伝統が、未来につながるようにとの趣意。

E 学院歌の歌詞

井上赳の作詞による学院歌冒頭の「おもひは遠し武庫川に とどめぬあとのかほよ鳥」の部分は、源家長の和歌「むこがはにあともとどめぬかほよ鳥 なく日もみえぬ五月雨のころ」を典拠とするものであろう。この部分は二番の「後の宮のみちからの 異国舟のふなつどひ そのいにしへのにぎはひを 武庫の浦曲にしのびつつ」へとつながる。歴史の彼方に、学院歌に詠われた本学院のルーツをさぐりたい。

II 「いにしへ」の武庫、武庫川、武庫の泊・津門、武庫の海

A 万葉集に詠まれた武庫

先ず万葉集によつて、「武庫の泊」「武庫川」「武庫の渡」「名次山」「角の松原」「武庫の海」「武庫の浦」などが、どのように詠まれているかを見よう。また、水の形態としての垂水（滝）および海上の嵐に言及した和歌も取り上げることにする。

文献

小島・木下・佐竹校注・訳『完訳 日本の古典 万葉集 三』小学館、一九八四年

小島・木下・佐竹校注・訳『萬葉集』（日本文学全集）小学館、一九七五年
神戸新聞出版センター編『兵庫県大百科事典』神戸新聞総合出版センター、一九八三年

「武庫の泊（とまり）」 泊・津＝港

万葉集 卷三・二八三

住吉の 江名津（えなつ）に立ちて 見渡せば 武庫の泊ゆ 出づる船人
高市連黒人（たけちのむらじくろひと）

ゆ＝くから

この港がどこにあつたか、その位置を確定することは困難である。しかしその位置が、広田神社と密接な関係にあることは確かである。平安時代中期の『和名抄』に武庫郡の津門（つと）とあり、そこがその港の位置と推定される。現在の津門西口町の津門神社の北隣、昌林寺門前の柱碑に「従是北二丁目津門村」とある近辺かと思われる。この歌は、江名津（大阪住吉神社の南方で堺市と接する位置の港）に向かつてくる船を見て、それが武庫の泊から出てきた船人だと想像している。

訳、住吉の江名津に立つて見渡すと、武庫の港から漕ぎ出したと思われる船人が見える。

「武庫川」

万葉集 卷七・一一四一

武庫川の 水脈（みお）速（はや）みか 赤駒の あがく激（たぎ）ちに、濡れにけるかも

水脈＝川の比較的深い流れの水脈。
あがく＝足掻く。
激ち＝たぎつの名詞形、水しぶき。

訳、武庫川の流れが速いからか、赤駒のあがきのしぶきで、衣が濡れてしまった。

馬に乗って路上を行く者といえば、公務で旅する官人か、摂津国内を巡視する国司と思われる。陸路の場合その場所は西国街道と推定される。なお、上代の武庫川の河口は、JRの鉄橋近辺であり、それより下流は入り海であつたと考えられる。

「武庫の渡（わたり）」

万葉集 卷一七・三八九五

たまはやす 武庫の渡に 天伝（あまづた）ふ 日の暮れゆけば 家をしぞ思ふ

たまはやす＝武庫にかかる枕詞。

天伝ふ＝入日にかかる枕詞。

武庫の渡＝船が武庫の入り江を通過する時、船が通ることになっている一定の通路。

船がこの通路にさしかかった時、冬の日はずでに暮れてきて、やむを得ずそこに停泊することになった。帰郷を焦る気持ちを表している。大宰府長官であつた大伴旅人は、大納言に任ぜられ奈良京に帰ることになり、先ず十一月に海路で帰郷した近侍（きんじ）の者の歌。

訳、武庫の港に日が暮れてゆくと、家のことばかり思う。

「有馬山、猪名野、猪名の港」

万葉集 卷七・一一四〇

しなが鳥 猪名野（いな）を来れば 有馬山 夕霧立ちぬ 宿りはなくて

しなが鳥＝猪名野のいにかかる枕詞、かいつぶりの古名。

猪名野＝猪名川流域の平野。

訳、猪名野をはるばるやつてくると、有馬山に夕霧が立ってきた、泊まるべき所もなくて。

万葉集 卷七・一一八九

大（おほ）き海 あらしな吹きそ しなが鳥 猪名の港に 船泊（は）つるまで

な＝「な・・そ」の間に動詞の連用形をはさんで、禁止の意を表す。懇願の気持ちを含む。

猪名の港＝猪名川の港。

訳、大海に 風よ吹くな 猪名の港に 船が着くまで。

「名次（なすき）山」「角（つの）・都努（つぬ）の松原」

万葉集 卷三・二七九

我妹子（わぎもこ）に 猪名野は見せつ 名次（なすき）山 角（つの）の松
原 いつか示さむ

高市連黒人

わぎも＝「わがいも」の略。妻や恋人など親しい女性、私のいとしい女性。

名次山＝西宮市名次町の丘陵地帯。

角＝西宮市松原町津門の地。

いつかは示さむ＝早く見せたいのだが、の意を含む。

訳、我妻に猪名野を見せた。名次山や角の松原は、いつになったら見せられよ
うか。

万葉集 卷一七・三八九九

海未通女（あまおとめ） 漁（いざ）り焚く火の おほほしく 都努（つぬ）
の松原 思はゆるかも

大伴家持の従者

おほほしく＝物の形がはつきりしないことにも、心が憂いや悩みで晴れ晴れし
ないことにもいう。

漁り＝漁法の名であろうが、詳しくは不明。

訳、海人おとめが焚くいさりびのように、おほっかなく 角の松原が思われる
ことだ。

「垂水」

万葉集 卷七・一一二七

命を 幸（さき）く良けむと 石走（いしばし）る 垂水の水を むすびて飲
みつ

幸く＝無事で。

石走る＝垂水の枕詞。

むすびて＝両方の掌を合わせて水をすくう。

垂水＝吹田市垂水の小瀑を詠んだものか（当時、滝と言う言葉はなく滝を大和
言葉で垂水と言った）。

訳、たぎり落ちる走り井の水が、あまりに清いので、見捨ててわたしは、立ち去りがたい。

「武庫の海」

万葉集 卷一五・三六〇九

武庫の海の 庭よくあらし 漁（いさり）する 海女（あま）の釣舟 浪（なみ）の上ゆ見ゆ

庭よくあらし＝ニハ（庭）は、収穫物を処理する作業場を広くいう。ここは漁場としての海面を指す。アラシはアルラシ。

律令時代の武庫郡の位置は、武庫川から夙川に至るまでであり、その海上を武庫の海といったであろう。時代が下つてくると、現在の神戸港和田岬付近までも武庫の海と称している。

武庫川の上流は上代からの森林伐採と急流のため、下流に大量の土砂が流出し、古くは入り海であったところに小曽根、小松、鳴尾、今津などの漁場に適した州浜が形成された。

『鳴尾村誌』（西宮市鳴尾区有財産管理委員会、二〇〇五年）の資料篇―鳴尾村関連年表によると、鳴尾村一帯は、武庫川の枝川との分流地点を中心にしてしばしば堤防が決壊し、大洪水に見舞われている。一六五九年の洪水は特に凄まじく、小曽根村付近の堤防が決壊し、小曽根、小松、鳴尾に大被害がもたらされ、全村流出。洪水の土砂により地域面積が倍増した。一九二〇年に改修工事が開始され、一三年に完成したと記されている。

訳、武庫の海の漁場がよいらしい。魚を捕っている海人の釣り船が、波の上に見える。

「武庫の浦」

万葉集 卷一五・三五七八

武庫の浦の 入り江の渚鳥（すどり） 羽ぐくもる 君を離れて 恋ひに死ぬべし

入り江の渚鳥＝渚鳥は洲にいる水鳥。

羽ぐくもる＝ククモルはククム（くるむ意の四段）に対する受身動詞。わたしがその慈愛によつて暖かく包まれていた、という気持。

武庫の浦は、武庫川の旧河口から西の一带の海をさすと思われる。この浦には砂州が点在していたから、鳥が巢を営んでいたと推測される。七三六年、新羅に派遣される使者が別れを惜しんで、見送りの妻と交わした冒頭の一首である。親鳥の「羽ぐくもり」なくして、ひな鳥は生きられない。自分も、あなたを慕って死ぬかも知れないという女の側の絶唱。

訳、武庫の浦の入り江の渚鳥のように、羽ぐくまれたあなたに別れて、恋に死にそうです。

『広辞苑 第六版』によると、

はぐくもる＝羽裏もる・育もる。羽に包まれている。養い育てられている。

はぐくむ＝育む、「羽包む」の意。一、親鳥がその羽で雛をおおいつつむ。二、養い育てる。三、なでいつくしむ。かばい守る。

万葉集 卷一五・三五九五

朝開き、漕ぎ出て来れば 武庫の浦の 潮干の潟に 鶴（たず）が声すも

朝開き＝早朝港から船出すること。

タズ＝ツルの雅語。

訳、朝早く船を漕ぎ出してくると、武庫の浦の潮が引いた潟（かた）に、ツルの声がすることだ。

万葉集 卷三・三五八

武庫の浦を 漕ぎみる小舟 栗嶋を そがひに見つつ ともしき小舟

山部赤人

漕ぎみる＝漕ぎ回る。

栗嶋＝淡路島の西側にあつたと推定される小島。

そがひ＝うしろの方。

ともしき＝心がひかれる。

訳、武庫の浦を漕ぎ回っている小舟。栗嶋を後ろに見ながら漕いでいる、心がひかれる小舟。

おもひは遠し 武庫川に
とどめぬあとの かほよ鳥
鳴尾のさとの 松かげに
みがくころは 真澄鏡
われらは学ぶ をとめにあれど
清く正しき 道に生きむと

后の宮の みちからの
異国船の ふなつどひ
そのいにしへの にぎはひを
武庫の浦曲に しのびつつ
われらは学ぶ . . .

紫けふる 六甲の
山脈にゆる 青嵐
武庫の河原の 松に鳴る
千代のひびきを たたえつつ
われらは学ぶ . . .

作詞者、井上 昶（たけし、一八八九—一九六五）

文献

藤富康子『井上昶 サクラ読本の父』勉誠出版、二〇〇四年

雨海博洋 序
藤富康子 著



井上昶 サクラ読本の父

勉誠出版

井上 趙 略歴

松江市出身の国文学者。第一高等学校（同期生には政治家の近衛文麿、作家の山本有三、歌人の土屋文明、一学年下には芥川龍之介、菊地寛、久米正雄などがいた）、東京帝国大学文科大学国文学科卒。一九二一年、鹿児島県の第七高等学校造士館教授の時、大学の先輩である高木市之助（九州帝国大学教授、上代文学会長などを歴任）に誘われ、文部省図書監修官となる。一九二五年から一年間、教科書研究のためイギリス、フランス、ドイツ、デンマーク、イタリア、アメリカに留学。文部官僚として戦前の国語教科書の編集に携わる。「サイタ サイタ サクラガ サイタ」で始まる『小学校国語読本』は、「サクラ読本」として有名。従来、『読本』の巻一の冒頭の単語（ハナ ハト マメ マス）から教えていたが、井上は文から習うように改めた。また、児童心理の発達段階に即して内容を編成すると同時に、『源氏物語』『東海道中膝栗毛』などを教材に取り入れ、文学教育の要素を強くした。サクラ読本は「国語教育史上最高の教科書」との評価もある。

一九四一年の国民学校への移行に際して『ヨミカタ』『初等科国語』（通称アサと読本）を石森延男らと編集する。アサと読本は軍部からの圧力に屈せず児童中心主義を守り通した。一九四四年、図書局廃止に抗議して辞職。戦後、担がれて一期だけという約束で衆議院選挙に出馬し当選。日本国憲法などの審議に参加し、二六条二項の成文中、「children」の訳語に「子女」を提言したのは井上である。

「花火」（ドンとなった花火だきれいだな）、「電車ごっこ」（運転手はきみだ車掌はぼくだ）、「蛭」（ホタルの宿は川端柳）、「田植」（そろた出そろた早苗がそろた）などの小学校唱歌の作詞者としても有名。なお、母校である県立松江中学校（旧制）の校歌の作詞者でもある。

武庫川高等女学校校歌の作詞については、井上趙氏から公江先生宛てに送付された自筆の手紙が、本学院の校祖室に展示されている。この手紙によると、校歌を作詞するための資料が公江先生から井上氏宛てに送付されていたことがわかる。その資料に目を通して井上氏は、「何分当地には一度も参じたることなく」と述べながらも、本学院所在地が「幸に古来、文学に名高く、和歌、謡曲等を通して親しまれた土地柄であるとの印象を強くし、早速、作詞に取りかかったとしている。

公江先生は、イギリスの伝統ある私学、具体的にはバブリック・スクール、さらにはオックスフォード及びケンブリッジ両大学に深い感銘を受けて本学院の設立を思い立たれたが、その際、本学院所在地の豊かな歴史性にも注目されたと思われる。

（「バブリック・スクール」については、池田潔著『自由と規律』岩波新書、一九四九年参照。）

「かほよ鳥」

鎌倉初期の歌人、源家長の歌『夫木和歌抄』

武庫川に跡もとどめぬかほよ鳥　なく日もみえぬ五月雨の頃（一二〇二年）

「学院広報」（N o. 九二四六、一九八三年六月二五日）には、かほよ鳥について次のような解釈が載せられている。

国文学科教授 井上 貫

「『おもひは遠し 武庫川に――』と歌いだす学院歌。学院に生活した誰しものを甘い郷愁にさそう懐かしい歌。今乞われるままに、一二三つ覚え書をするして学院の歴史の一端にふれてみたい。――中略――

公江先生は親交のあつた当時の文部省師範教育課の乙黒健夫氏に作詞者のあつ旋を依頼され、その紹介で文部省図書館編集課長井上赳氏が作詞されたのであつた。――中略――

現在の学院歌は詞・曲ともに美しく、親しみやすいものであるが、それでも歌詞に一つ二つ問題点はある。かつて本学の教授で平安朝文学の大家として知られていたM教授が私に猛烈に抗議されたことがある。いわく、

『井上さん。かほよ鳥て、何ですか。そんな鳥、いませんよ。』――中略――

『かほよ鳥』は明らかでない。小学館の『日本国語大辞典』も『不明』とし、おしどり・かわせみ・きじ・よぶこどりの異名かといひ、壬二集（藤原家隆の歌集）や古今六帖の藤原隆祐の歌と謡曲雲雀山の一節をあげているが、ここは夫木和歌抄の

武庫川に跡もとどめぬかほよ鳥なく日もみえぬ五月雨の頃
がその出典で、かわせみの謂であらう。――中略――

なお、この解について同僚の二三の教授も同意しており、私の独断でないことも付記しておこう。」

松村・山口・和田編『古語辞典』（旺文社）によると、よぶこどり【呼子鳥】は、鳴き声が人を呼ぶように聞こえる鳥。今の郭公の異名か、とある。

中西悟堂『定本 野鳥記』第五巻によると、かほどりの解釈には、オシドリ説、カワセミ説、キジ説、フクロウ説、カツコウ説の他、ミミズク、ヨタカ、ヒバリ、カラス等があつて、最も難解な鳥の一つとされている。その特徴としては、一 夜鳴くこと、二 間なくしば鳴くこと、三 雌雄の仲が睦ましいこと、四 鳴声、五 朝ゐでに鳴くこと（ゐは井堰と解釈）、六 木のくれがくり（暗隠り）に鳴くこと、をあげてカツコウであらうと判断している。

菅原浩・柿澤亮三編著『図説日本鳥名由来辞典』（東京柏書房、一九八三年）によると、難解な鳥の古名の一つとしながらも、奈良時代に「万葉集」に詠われた「かほとり」と、平安時代以後の文学に現れた「かほとり」とは、別のものではない

かとしている。

“かほとり”は、その漢字表記（容鳥、貌鳥、杲鳥）からしていずれも容貌を意味し、したがって姿の美しい鳥と解することができる。そのことは、平安時代以後の“かほとり”について当てはまり、鎌倉時代になって現れる“かほよとり”（容好鳥）は、この意味での“かほとり”の異名となる。

万葉集の“かほとり”を詠んだ歌五首は、いずれもその鳴声を述べているだけで、姿の美しさを詠ったものは一つもない。

“かほとり”の由来については、それが「カホ」と鳴くからだという説がある。その場合には、カツコウ以外にカラス、アオバトなども含まれることになる。

“かほよどり”については、「ギジ（雄）」説と「カワセミ」説が有力だとしている。さらに「フクロウ」説もあるが、これは美しさよりも鳴き声によるものであるという。

かほとりの歌

	年代
春日（はるひ）を・・・三笠の山に朝さらず 雲ゐたなびき容鳥の間なく 数（しば）鳴く	
山部赤人 万葉集卷三・三七二	七〇〇
朝ゐでに来鳴く貌鳥汝（なれ）だにも 君に恋ふるや時終へず鳴く	
万葉集卷一〇・一八二三	七〇〇
やすみしし・・・かきろひの春にしなければ春日山 三笠の野辺に桜花木の 晩隠りかほ鳥は間なくしば鳴く・・・	
万葉集卷六・一〇四七	七〇〇
かほ鳥の間なくしば鳴く春の野の 草根の繁き恋もするかも	
万葉集卷一〇・一八九八	七〇〇
大君の命（みこと）かしこみ・・・山傍（び）には 桜花散りかほ鳥の 間なくしば鳴く	
万葉集一七・三九七三	七〇〇
おとはやまこのした影にかほとりの みえがくれせしかほのこひしさ	
伊勢 伊勢集	九三八

- まどひつついくよぬらんかほ鳥の 見えし山路になほもはるけき
藤原元真 元真集 九六〇
- 夕されば野べに鳴くてふかぼどりの かほにみえつつわすられなくに
古今和歌六帖 九七六
- かほ鳥のすだくみぬまのかきつばた ひとへたつべき我が心かは
源俊頼 扶木和歌集卷六 一一二九
- かほ鳥は人にもいたく見えじとや 草がくれつつ鳴きわたるらむ
源師光 正治初度百首 一二〇〇
- 春といへば野べにしばなくかほ鳥の いやとしのはにおもがはりせぬ
源隆房 正治初度百首 一二〇〇
- むしがわにあとをとどめぬかほよ鳥 なく日もみえぬ五月雨のころ
源家長 千五百番歌合 一二〇二
- わすられぬそのおもかげはかぼどりの こゑきくだにねはなかれつつ
藤原為家 新撰和歌六帖卷六 一二四三
- 春の野にきなくかぼど리카ほよしと みし人あらば恋ひやしなまし
葉室光俊 新撰和歌六帖 一二四四
- 夕さればまほにもみえぬかぼどりの 声もほのかにかすむ野べかな
衣笠家良 新撰和歌六帖卷六 一二四四
- ありとてもまだ見もしらぬかほ鳥の いとどかすみにそらかくれぬる
藤原信実 新撰和歌六帖 一二四四
- 我もさぞ老にやつるるかぼどりの みてはずかしきねはなかれぬる
藤原知家 新撰和歌六帖 一二四四
- 見し色を忘れし花の貌鳥も 音に啼く山の春の面影
正徹 草根集 一四五九
- あさき江にかつ見る花の貌鳥も うき太山木にかけならへそ
正徹 草根集 一四五九

何となくものわすれしつかほ鳥の しげみにかよふ春の山里

肖相

一五二七

春日野にまなくしばなくかほ鳥の 声なつかしき春はきにけり

本居宣長 鈴屋集四之巻

一八〇三

菅原浩・柿澤亮三編著『図説 日本鳥名由来辞典』によると、奈良時代から用いられている「かほどり」はいろいろと解釈されているが、奈良時代の「かほどり」はカッコウで、さらに「はこどり」も平安時代におけるカッコウの古名の一つであること、しかし平安時代の「かほどり」は、姿の美しい鳥（オシドリ、キジの雄、カリセミ）とするのが穏当であろうという。

奈良時代の「かほどり」、平安時代の「はこどり」は共にカッコウで、その語源はいずれも鳴き声によるものであり、かほどりはカッホー、はこどりはハッコーと聞き做していたと推定している。

平安時代以後になると、“かほどり”は姿の美しい鳥とみなされるようになり、いろいろな美しい鳥が“かほどり”と考えられるようになった。「源氏物語」宿木の巻の終に、薫が「かほ鳥の声も聞きしに通ふやと 繁みをわけて今日ぞたづぬる」と詠んでいる。ここでは、“かほどり”は美しい鳥として浮舟に譬えている。

カッコウの鳴く時間について、山中湖畔で午前二時二六分、富士須走で午前二時五〇分に鳴いたという記録があるという。次に、はこどりを詠んだ歌を挙げる。

はこどり（箱鳥）の歌

	年代
みやまぎに夜はきてねるはこどりの あけてはかえらん事ぞわびしき 藤原輔相 藤六集	九五七
とりかくす物にもがもやはこどりの あけてくやしきものをこそおもく 古今和歌六帖	九七六
み山木によるはきて鳴くはこどりの あけばかはらんことをこそおもく 古今和歌六帖	九七六
はるたてば野べにまつなくはこどりの めにもみえずてこゑのかなしき 古今和歌六帖	九七六
くものうくにおもひのぼれるはこどりの いのちばかりぞみじかかりける 徽子女王 斎宮女御集	九八五

- なつのよのあけぼのことにはこどりの ふたよりみよりなきわたるかな
別田千穎 千穎 九九〇
- はこどりのあけてののちはなげくとも ねぐらながらのこゑをきかばや
藤原実方 実方集 九九五
- 故郷のことづてかとはこ鳥の なくをうれしと思ひけるかな
増基法師 増基集 九九五
- はこどりの身をいたづらになしてて あかづかなしき物こそ思へ
増基法師 増基集 九九五
- やすらはずおもひたちにしあづまぢに あるけるものをはこどりのせき
藤原実方 実方 九九五
- みやま木にねぐらさだむるはこ鳥の いかでか花の色にあけべき
紫式部 源氏物語若菜 一〇一四
- ふたむらの山のはしらむしののめに 明けぬとつぐるはこ鳥の声
小侍従 正治初度百首（正治二年） 一一〇〇
- 夜はきてあくるかなしきはこどりは いつうらしまにかよひそめけん
藤原為家 新撰和歌六徴卷六 一二四三
- 明けわたるみむろの山のはこどりは ふたふたところそとびあがるなれ
葉室光俊 新撰和歌六帖 一二四四
- なにことを思ひいれてかはこどりの あくるあさけのねをぼなくらん
藤原知家 新撰和歌六帖 一二四四
- よるはきてあくればかへるかほどりの つらきならひにねをやなくらん
衣笠家良 新撰和歌六帖卷六 一二四四
- まちわびて諸声に鳴くよはこどりに 明けてくやしき箱鳥の声
僧宗知 林葉累塵集十二 一六七〇

松村・山口・和田編『古語辞典』（旺文社）によると、かほどり（貌鳥、容鳥）は美しい鳥の意とも、また、特にカッコウともいわれる。また、次のような用例も見られる。

かほよ・ばな（顔佳花）＝ 一 かきつばたの異名、 二 美人。
かほよ・びと（顔佳人）＝ 美人、美しい女性。

鳴き声を起源とすると思われる「かほとり」と「はことり」に、それぞれ「貌鳥、容鳥」、「箱鳥」といった漢字を当てようになるにつれて、前者は鳴き声よりもその姿が注目されて美しい容貌の鳥へ、そして後者は鳴き声とともに「箱を開ける」「夜が明ける」といった視点からその名が注目される鳥へと移行していったのではないか、と思われる。

「かほとり」が美しい鳥を意味するようになったことは、上記の葉室光俊の歌「春の野にきなくかほとりかほよしと みし人あらば恋ひやしなまし」から明らかである。この歌は、源家長の「かほよ鳥」の歌の四二年後に詠まれており、ほぼ同時代の歌と考えてよからう。

このように「かほとり」は、奈良時代には「間なくしば鳴く」「時終へず鳴く」と詠まれたように、その特徴のある「鳴き声」に注目して歌が詠まれた。しかし平安時代以降、「美しさ」が注目されるようになって、かほとりは、姿の美しい鳥へと移行していく。その結果、かほとりは、カツコウからキジ（雄）、カワセミ、オシドリなどへと徐々に移行していくが、他方で「かほとり」にかわって「はこどり」が、カツコウの異名となる。

ただ、かほ鳥の用例を見ると、それが一挙に美しい鳥へと移行したとは考えられない。たしかにかほ鳥は、その発音からして顔を連想させるし、それに漢字の「容」「貌」等を当てようになるにつれて、その姿、面影、容貌、美しさが注目されるようになっていった。しかし他方で、その鳴き声が忘れられたわけではない。

かほとりは、夜、木の繁みや草むらで鳴く。そのため、その姿や容貌を目にしようとしても、それができない場合がほとんどではなかったかと思われる。そのことは、源師光の「かほ鳥は人にもいたく見えじとや 草がくれつつ鳴きわたるらむ」、さらには衣笠家良の「夕さればまほにもみえぬかほとりの 声もほのかにかすむ野べかな」にも示されている。

学院歌の「かほよ鳥」が「容好鳥」であるとするれば、武庫川という川との関係や美しい鳥であることからして、カワセミが有力となってくる。次に示すように、カワセミは水中の小魚やザリガニなどをとり、姿の美しさから「空飛ぶ宝石」とも称されるからである。ただ、カワセミは渡り鳥ではない。したがって、五月雨の頃にその姿が見えず、鳴き声も聞こえないという歌の表現と矛盾するという問題が残される。

また、かほよどり（容好鳥）が「姿の美しい鳥一般」を指すのであれば、一種類の鳥に限定する必要はなく、複数の美しい鳥を「かほよ鳥」とみなしてもよいこと

になる。あるいは、鳴き声を聞きながら、目にすることのできない美しい鳥の面影を思い浮かべているのであれば、それに特定の鳥を当てる必要もないであろう。

さらに、学院歌の歌詞の「かほよ鳥」が、どのようなコンテキストで作詞されているのかという視点も重要である。学院歌は、「おもひは遠し 武庫川に とどめぬあとの かほよ鳥」で始まる。ここでは「おもひは遠し」および「とどめぬあとの」という歌詞が注目される。そしてそれが二番の「後の宮の みちからの 異国船の ふなつどひ そのいにしへの にぎはひを 武庫の浦曲に しのびつつ」へと続く。そのことを考えると、今やすっかり遠い歴史の彼方に埋もれてしまった在りし日の「にぎはひ」を、「かほよ鳥」に託して偲んでいるように思える。

もしも学院歌が「いにしへの にぎはひ」を、「かほよ鳥」に託して偲んでいるとすれば、「かほよ鳥」は必ずしも鳥である必要はない。一見大胆な推測と思われるかも知れないが、例えばそれは神功皇后であつてもよい、という一つの仮説が考えられる。

というのは、学院歌には新旧二つの歌詞があり、現在の歌詞の「異国船の ふなつどひ」の部分は、旧の歌詞では「ことむけたまひ 新羅船（しらぎふね）」となっているからである。（二二で「ことむけたまひ」というのは、武力によつてではなく言葉で説いて従わせるという意味である。そしてこの「ことむけたまひ」という表現が用いられた理由としては、神功皇后に対するアマテラスの託宣が「もし私を手厚く祭つたならば、刃を血塗らずして、金銀財宝に満ち溢れた国（新羅）を帰服させよう」と言つたと、『日本書紀』に記されていることがあげられる（『古事記』にも同様の記述がある）。

このように鳥を人に譬える用例は、すでに述べたように『源氏物語』にもある。『源氏物語』の宿木の巻の終わりに、かほどりを美しい鳥として浮船に譬えているのである。学院歌の作詞者、井上超の東京帝国大学文科大学国文学科の卒業論文のテーマは「源氏物語」であり、氏はこの点について精通していたと考えられる。

なお、「いにしへのにぎはひ」が、どのようなものであつたかについては、神功皇后をも含めてその背景を多面的に明らかにする必要がある。

『広辞苑』

かわせみ

スズメより大型で、尾は短く、嘴は鋭くて長大。体の上面は暗緑青色、脊・腰は美しい空色で、「空飛ぶ宝石」とも称される。水中の小魚やザリガニなどをとる。巣は、崖に横穴を掘つてつくる。ヨーロッパ・アジアに分布。

「真澄鏡」

『広辞苑』によると、一、（名）「ますみのかがみ」の転。二、（枕）「見る」「照る」「研ぐ」「懸く」「清き」「面」「影」などにかかる。

なお、三種の神器の鏡は「正直」の徳を象徴するものであり、自己の内面に徹して結果責任を負う態度を前提とする。（他の二つは「慈悲」と「知恵」を示す。）

「後の宮」

后は神功皇后。後の宮は広田神社。

「武庫の浦曲」は、後述するように「武庫の泊」＝「務庫の水門（港）」と考えてよからう。

『広辞苑』

神功皇后

仲哀天皇の皇后。名は息長足姫（おきながたらしひめ）。開化天皇の曾孫、息長宿称王（おきながすくねのおう）の女（むすめ）。天皇とともに熊襲（くまそ、記紀伝説に見える九州南部の地名、またはそこに居住した種族。肥後の球磨くまゝと大隅の贈於くまゝか）征服に向かい、天皇が香椎宮で死去した後、新羅を攻略して凱旋し、誉田別皇子（ほむたわけのみこ、応神天皇）を筑紫で出産、摂政七〇年にして没。（記紀伝承による）

高森明勅監修『歴代天皇事典』PHP文庫、二〇〇六年

仲哀二年、熊襲が背き貢物をしなかった。そこで、仲哀天皇（四世紀後半に活躍したと考えられる天皇）は熊襲を討つために出征した。そして、仲哀八年、橿日宮（かしひのみや）で神功皇后に神託があり「熊襲より新羅を討つたほうがよい」といった。天皇はこの神託が信じられず、熊襲を討ちに行つたが、勝利することができなかった。その翌年、天皇は橿日宮で急に病氣となり崩御した。

文献

溝口睦子『アマテラスの誕生』岩波新書、二〇〇九年

神功皇后が三韓を支配下においたという神功皇后伝説は、そのほとんどがおとぎ話といってよいが、新羅に関してはそうともいい切れないとしている。というのは、第一級の史料ともいえるべき高句麗の好太王（広開土王）碑文に、四〇〇年、好太王が歩兵・騎兵五万を遣わして新羅を救援して新羅城に至ると「倭がその中（新羅城）に満ちていた」と記されているからである。神功皇后伝説は四世紀末の出来事であるが、四世紀末から五世紀の初めにかけて、倭はしばしば新羅に侵攻したことも史実として認められている。

「推古朝に、新羅が日本にたいして『調物（みつぎもの）』を貢献する朝貢国としての礼をとつていたことが文献で確かめられる。――中略―― 神功伝説は、そうした新羅との関係の起源を語るものとして、『記・紀』で重要視されているわけで

ある。」（一六〇―一六一頁）

「四世紀から五世紀前半にかけてのころ、東アジアは激しい動乱のなかにあつた。―中略― いわゆる『五胡十六国』の時代（三〇四―四三九）が幕をあげる。すなわち『五胡』とよばれる北方遊牧民族が大量に中国大陸の北部地域（華北）に進入して、次々に国を建て、四三九年に鮮卑（せんび）族が建てた北魏によつて華北が統一されるまで、約百三十年間もの長期にわたつて興亡を繰り返した動乱の時代である。」（一二二頁）

この動乱で中国王朝が弱体化したことにもよるが、四世紀前半に、朝鮮半島は中国の支配から脱した。四、五世紀の高句麗は、西は高度な文字文明を有する中国と、北は豊富な神話と伝承を有する遊牧民の国家と接し、両文化を融合させて強大な国家を形成し、南は朝鮮半島の半ばまでを領土としていた。そしてさらに南下してきたこの先進大国の高句麗に、四〇〇年の戦いで、倭は大敗した。朝鮮半島南端でのこの大敗は、その目と鼻の先に位置する倭に、王系の交代をもたらしたといわれるほどの強い衝撃を与えた。神功皇后を母とする応神天皇、そして仁徳天皇の巨大古墳が、奈良盆地から大阪平野に移されたこと、そして古墳の埋蔵施設や副葬品、生活用具に、朝鮮半島文化の強い影響が見られることなどに、その衝撃の一端が見られる。

さらに日本の天孫降臨神話は、本来、北方遊牧民族のものであり、それが一大文化の中継地点である朝鮮半島を経由して、五世紀初頭に日本にもたらされたのではないかという。

「天皇家の先祖である天孫に、地上世界（日本）の統治を命じて天下らせたのは誰かという問題は、実は研究者の間では、すでにかなり以前に決着がついている。すなわち、―中略― 『タカミムスヒ』という忘れられた神が、天孫に天下りを命じた降臨神話本来の司令神（主神）であつて、『アマテラス』はあとからその地位についた後発の主神だということが、すでに共通の認識になつている。」（六三頁）

イザナギ・イザナミ―アマテラス・スサノオ―オオクニヌシは、南方系の海洋的世界観に基づく神々で、日本では地方豪族によつて支持されていた土着系の神々であり、八世紀までの伊勢神宮は、太陽神を祭る地方神の社であつた。

北方遊牧民系のタカミムスヒが日本の皇祖神・国家神であつたのは、ヤマト王権時代の五―七世紀であり、アマテラスがそれにとつてかわつたのは、律令国家成立以降の八世紀からだという。これによると、神功皇后が託宣を受けたアマテラスは、当時、いまだ主神の地位にはついていなかったことになる。この交代の契機となつたのは、六六七年、白村江（はくそんこう）の戦いで、日本・百濟連合軍が、唐・

新羅連合軍に惨敗したことにある。この惨敗も、日本の支配者に強烈な衝撃を与えた。

六六七年の唐・新羅連合軍との白村江での惨敗、さらに四〇〇年の高句麗との戦いでの大敗は、幕末における黒船の来航と同様のショックを日本に与えた。これらはいずれも、格段に高い文化や軍事力を備えた先進国との遭遇によってもたらされた未曾有の危機であった。その危機を乗り越えるために、日本は、先進国の文化や技術を導入したが、その際、まず北方遊牧民の天孫降臨神話の導入によって外来のタカミムスヒを主神とし、ついで土着のアマテラスを主神とすることによって、国内における権力の集中と統一国家の形成に取り組むことを迫られたのである。

「一方倭国にとって、朝鮮半島南部との安定した交流は、当時の支配層にとり生命線ともいえるものだった。その第一は鉄の確保である。東潮氏によると、弥生時代以来五世紀半ばまでの数百年間、日本は鉄素材を基本的に朝鮮半島南部の弁韓・加羅・慕韓地域に依存していた。日本列島内部で製鉄が開始されるのは、五世紀も後葉に入ってからのことだという。鉄が、当時社会の発展にとって不可欠の資源であったことについて、改めて述べる必要はないだろう。むしろ鉄だけでなく、さまざまな先進技術や文字文化などの導入は、まさに文明への道を歩み始めようとしていた当時の日本社会が渴望していたものである。そしてそれらは、この時代にはすべて朝鮮半島からやってきた。」（三〇―三二頁）

「高句麗は、四世紀後半にはいると南方に主力を移し、百済・新羅への侵攻を活発化させはじめる。――中略――このころから、高句麗にとっては南下策が領土拡大のための主要な戦略となり、百済にとってはそれは、死活を決するきびしい戦いとなっていく。

その対策として百済は倭国に軍事的支援を求め、見返りに倭国は先進文物の供与をうけるという二国間の関係が、七支刀（しちしとう）の贈与が明らかにしているように、三六九年ころから始まった。七支刀は、百済からもたらされた七つの枝がついた特異な形状の刀剣である。『泰和四年（三六九）』にはじまる六十一文字の銘文があり、金で象嵌されている。国宝として奈良県天理市の石上（いそのかみ）神宮に保存されている。

その後紆余曲折を経ながらも、七世紀に百済が滅亡するまで、その関係は一貫して長く続き、古代における日本の対朝鮮外交の一つの柱になっている。『随書』倭国伝、開皇二十年（六〇〇）に、『新羅・百済は、倭国を大国で珍しい物の多い国として敬仰し、つねに使者を往来させている』とある。百済や新羅からみれば日本は、面積的・人口的にたしかに大国で、味方につけるにせよ敵に廻すにせよ無視できない国だった。」（二九―三〇頁）

文献

魚澄惣五郎編『西宮市史 第一巻』一九五九年

語源

「西宮地方は、古代には務庫・武庫すなわちムコと呼ばれていたようである。その文献上の初見は、日本書紀神功皇后摂政元年の条である。皇后が新羅を攻めて帰国されたとき、その船は紀伊水門（みなと）からまっすぐに難波へむかったが、海中を回って進むことができないので、務庫水門（むこのみなと）にかえられた云々とある。また日本書紀応神天皇三十一年秋八月条には、諸国から一時に五百の船が貢され、ことごとく武庫水門に集まったとある。この務庫水門・武庫水門が西宮地方のことであろうと考えられている。―中略― 嘉応三年（一一七一年）広田神社にあてた官宣旨には、神功皇后が異賊と合戦した兵具を納めたのが、武庫山の名のもとであるといい、鎌倉時代末期の僧虎閑師錬の著元享釈書（げんこうしゃくしょ）にも同様な説がみえる。」（三六五―三六六頁）

「このような古説に対し、すでに賀茂真淵が冠辞考（かんじこう）にとなえているが、近代の有力な説は、ムコとは「向こう」「すなわち対岸の意で、難波の津から見て向こうの水門という意味だ」という説である。その傍証として、広田神社に鎮座する天照大神の名は天疎向津媛（あまざるむかつひめ）『神功摂政前紀』である。（喜田貞吉「上代の武庫地方」摂津郷土史論所収）」（三六六頁）

「このようにムコ地方が向こうの津という意味であるとすれば、それは難波からのぞんで、その対岸の港という意味であり、それは、こちらの岸の難波の津が、すでに成立していたことを前提とする言葉である。難波の津は、奈良盆地に都をおく大和朝廷にとって、西側瀬戸内海に面した門戸であり、西国支配の重要基地である。それゆえに難波の津のできたのは、大和朝廷の成立と時を同じくするといつてよいであろう。」（三六七頁）

難波は大津ともいったことが応神天皇二十二年条にみえている。ムコの津は、この大きな津である難波の津と一体をなして、大和朝廷のもつとも重要な港としての機能をいとなんでいたのである。そこでこの大阪湾沿岸地帯が津の国とよばれたらしい。

ただし、ムコが向こうを意味するという説には異論もある。向こうは古代においてはムカフであり、ムカフがムコーと長音化するのは中世になってからだというのである。（武庫川女子大学文学部国文科編『阪神間の文学』和泉書院、一九九八年）

「武庫郡」

摂津の西部にあった旧郡の一つで、北は有馬郡、東は川辺郡、南は大阪湾に臨み、西は菟原郡とそれぞれ接していた。『和名抄』には賀美（かみ）・児屋（こや）・武庫・石井・曾弥（そね）・津門（つと）・広田・雄田（おた）の八郷がみえ、郡名の初見は『続日本紀』天平神護二年（七六六）の「武庫郡」であるが、「応神紀」三一年（三〇〇）に「武庫水門」がみえる。（『兵庫県大百科事典』小学館、一九六三年）

「武庫之荘」

尼崎市北西部に当たる武庫地区（旧武庫村域）の中心地を指す。地名の起源は、『和名抄』にみえる武庫郡八郷の一つ武庫郷に始まり、ここが古くから摂関家藤原一門の所領となり、鎌倉時代に奈良の春日神社と興福寺に寄進されて「武庫之荘」と呼ばれていたことによる。（『兵庫県大百科事典』）

「武庫庄遺跡」

尼崎市武庫之荘本町一帯径三〇〇mの範囲に遺物の散布の認められる弥生時代の集落遺跡。標高七一八mの伊丹段丘の末端に位置し、古地図によれば、遺跡の南西を古武庫川が流れていたことが明らかであり、その左岸に位置する。（『兵庫県大百科事典』）

「広田神社」

祭神は、ツキサカキイツノミタマアマサカルムカツヒメノミコト〈天照大神（あまてらすおおみかみ）の荒魂（あらみたま）〉。神功皇后征韓のさい、オオミカミが示現し「わが和魂（にぎみたま）は皇后の身を守り、荒魂は艦船を導くであろう」といい、皇后凱旋のとき「わが荒魂は広田の地にとどまるであろう」との神示が当社の起源とされる。古来、伊勢神宮の別体として広く上下の信仰を集めてきた。（昭和出版研究所編『日本百科大事典』）

天照大神荒魂＝天疎向津媛。

神功紀（日本書紀神功皇后摂政元年）に、神功皇后が葉山媛に広田大神をまつらせたという記事がある。日本書紀によると、神功皇后が新羅を征しての帰途、筑紫で皇子（応神天皇）を産んだため、仲哀天皇の二人の皇子が謀反をたくらむ。皇后の船は難波の津へ向かったが叶わず、武庫水門に帰って占った。すると天照大神が教えて「われの荒魂を皇居に近づけてはならぬ、御心広田の国におらしむべきである」といわれたので、山脊根子（やましらのねこ）の女、葉山媛にまつらせたとある。

七〇六年、凡河内忌寸石麻呂（おおしろこうちのいみきいしまろ）が摂津国造に任じた。葉山媛は山脊根子（やましらのねこ）の女であるが、この山脊根子の祖先は凡河内（おおしろこうち）氏の祖先と同じ天津彦根命（あまつひこねのみこと）

であるという伝承がある。凡河内忌寸氏はこの地方の名族として、古来さかえていたらしい。つまりこの地方は、朝廷成立以前に凡河内氏と山脊氏が勢力をはっていた地域だと考えられる。

天津彦根命（あまつひこねのみこと）は、日本書紀の天照大神と素戔鳴尊（すさのうのみこと）との天眞名井（あめのまない）の盟約に際して、素戔鳴尊によって生まれた神々の一人であり、この神々とその子孫とされる氏族は、天孫系ではなく国神系であり、大和朝廷以前の土着の氏族とその神であると考えられる。（『西宮市史 第一巻』三六五―三七二頁、要約）

和魂・荒魂

「古代人は神のはたらきに和・荒の二面を考え、戦闘のようなときには、神威のはげしいはたらきがあらわれるのを荒魂のゆえと考えた。敵に対してもはげしいはたらきは、神をまつり信ずる人にもはげしい場合があるとしておそれられ、かように皇居から離れたところにまつるべきだと信じられたのであろう。」（三八四頁）

D 武庫の泊・水門・津・津門の位置と形状

『西宮市史 第一巻』では、「神功紀を最初とし、その後の日本書紀に散見する務庫水門の位置については、古来諸説まちまちで定説がなく、いずれもこじつけの説であった。」（八八頁）と述べている。

その位置および形状の確定には、かつて多くの困難が伴ったと言つてよい。しかしこの市史では、宮水・地層の分析、弥生式時代の遺跡・遺物の分布などの客観的証拠を手がかりとして、多面的な視点からその位置と形状を以下のように推定している。

「宮水が醸造用水として比類がないといわれる理由が、一般の地下水に比較して、硬度と、塩素・硝酸・磷を顕著に含有している科学的成分によるもので、これらが一方では発酵を助長し、他方ではこれを規制しつつ美酒を醸成するという、複雑微妙な作用が発酵学上証明された。―中略―

元来宮水が、その最初からこれを含含有するものでないことは、伏流の源である夙川・六湛寺川・御手洗川などの流水が、まざりけのない軟水（塩類をほとんど含まない水）であることから明らかである。」

検討の結果、これらの塩素・硝酸・磷は地下水地帯に流入して後に付加されたものであることが明らかになる。

「一般に宮水井戸の塩分が上昇すると、それにつれて硬度が高くなることから、

海水の浸透と硬度が無関係でないことが推定される。「中略」ところが「中略」宮水地帯の(海水の浸透が不可能と考えられる)北部地区全域の地下水そのものが、塩分とともに硬度が高く、これがまた下流の宮水と無関係でないことが推定されるのである。北部地区の地下水の塩分や硬度が比較的高いことは、のちに説くようにこの地帯がまた古く海であったことを思いあわすと、その理由がうなずけるであろう。」(八三十八五頁)

さらに、かつて海であったと推定されるところの砂層が、六甲山地の基盤となる岩石の風化したものであり、それが相次ぐ大洪水によって押し流され堆積したと考える。

「北部地区の後方に連なる上ヶ原台地の縁辺には、至るところに弥生式時代の遺跡や遺物が分布することは、考古学上いちじるしいことであり、同時に古墳が散在することも人の知るところであるが、東部地区の津門からは、かつて銅鐸が出土し、前方後円墳がすくなくとも二基あったことが知られ、西宮神社の表大門付近もまた弥生式時代の遺跡である。そしてその中間の北部地区からは不思議に遺跡や遺物が認められないのみか、この地区の中心にあたる阪神国道付近の地下三―四メートルのところから葎の根にまじり、シジミ貝が多く出土する。



『西宮市史第一巻』より

津門や西宮神社付近の低地が弥生式遺跡であるということは、この時代にすでにこれらの地域が陸地であり、北部の台地と地続きであつたことを証していると推定される。津門の場合はおそらく武庫川の氾濫によつて形成した扇状地の西南部へ、夙川や御手洗川の搬出する土砂が吹き寄せられ、ここに砂層を堆積してその主要部の土地が形成されたものと思う。一方西宮神社付近の地形を考えると、その西北にあたる宮西町の西半が、もと洪積層の台地の先端であつたことが、地形地層の現状からも察せられるところで、背後の夙川丘陵がこの辺まで伸びて、海中に突出していたその端から東方にむかい、ほぼ一直線に砂嘴が形成されたことが推定される。夙川の搬出する土砂が沖へ流出するのを、潮流や風力で吹き寄せたもので、はじめは潮の干満で波間に隠見する州にすぎなかつたのが発達してついに砂嘴を形成したものであろう。そして陸化した津門との間に入り海をいなく地形が形成されたもので、神功紀に見える務庫水門の入り海をさすものと推定するのである。

津門から出土した銅鐸は、弥生式時代中期の顕著な文化遺産である。日本民族がはじめて稲作の技術を伝え、鉄器や青銅器などの金属器を知ることによつてはじまつたこの時代に、津門が青銅製の銅鐸のようなすぐれた工芸品をもつていたことは、その地の経済的、文化的基盤の高さを示す尺度になるであらう。そしてその基盤が、この入り海に臨む地の利の上に築かれたことが察せられるのである。

このころの交通は主として船であつた。航海術の進歩しない当時の海上交通は、島から島へ、港から港への沿岸航海であつたから、この入り海はよい船溜りであつたろう。このころしだいに盛んになった大陸往復の船が難波の津へ入る前後に、この入り海へ泊まつたことは容易に察せられるのみでなく、日本書紀の伝えるところともよくあい、疑う余地がないであらう。かくて津門は港町として栄えたものと推定してほぼ誤りなく、地名ツトの起原がまたこれを証していると思う。すなわち、ツは港であり、トは大戸・脊戸・瀬戸などのトで、入り海の口のような場所をさす国語であり、津門が発祥したころ、地形から名付けられた地名と解せられるからである。

弥生式時代中期から古墳時代中期にかけて、さしも栄えたこの港も、万葉集に詠ぜられたのを最後に、記録や史料から姿を消してしまうが、この間数百年に入り海は、ここに注いだ夙川や御手洗川の搬出する土砂で埋まり、ついに港としての機能を失つたことを意味するかと思う。」（八九一九一頁）

「武庫水門は、難波の津から船で旅程一日の位置にあり、大陸との交易・交渉や中国・四国・九州への旅路は瀬戸内海を経由していたことから、武庫川河口付近はこの時代から交通の要衝としての地位を占めていた。また、ここは朝鮮半島・東アジアの諸国から来朝した船が停泊し、使節が宿泊する設備も整えられていた。津門・綾羽町・津門・呉羽町の町名の由来となつた漢織（あやはとり）・呉織（くれはとり）という衣縫工女（きぬぬいめ）の渡来伝説も名高い。」（『鳴尾村誌』四一頁）

E 瀬織津姫（せおりつひめ）

文献

菊池展明『エニシの国の女神』風琳堂、二〇〇〇年

山水治夫『瀬織津姫物語』評言社、二〇〇八年

伊勢の地に天照大神（あまてらすおおみかみ、女神）が祀られるまで、別の女神（瀬織津姫）が天照大神（あまてらすおおみかみ、男神）の后神として一対で祭られていたという説がある。伊勢神宮内宮の荒祭宮（あらまつりのみや）に祀られている天照大神荒魂（あまてらすおおみかみあらみたま）は、瀬織津姫のことであると『倭姫命世紀（やまとひめみことのせいき）』（平安末期か鎌倉時代の伊勢神宮の神官・度会（わたらい）氏の創作）に書かれている（山崎闇斎『風水草』）。（『エニシの国の女神』一七一―一九頁）

瀬織津姫は、大祓祝詞にその名がある。

をちかたのしげきがもとを やきがまのとがまもちて
うちはらふことのごとく のこるつみはあらじと
はらくたまひきよめたまふことを たかやま（高山）のすえひきやま（低山）の
すえ（末）よりさくだなりにお（落）ちたぎつ はやかわ（速川）のせ（瀬）に
ま（坐）す
せおりつひめ（瀬織津比売）といふかみ（神）
おほうなばら（大海原）にもちいで（持ち出）なむ かくもちいでなば
（訳、高い山、低い山を水源として勢よく流れ下る速川へ谷川への川瀬に坐す瀬
織津比咩神の力によつて、人々が犯した罪や穢れを大海原に持ち出してしまふ。）
あらしほのしほのやほじの やしほのやほあいになす
はやあきつひめ（速開都比売）といふかみ
もちかかのみてむ かくかかのみてば いぶきどになす
いぶきどぬし（気吹戸主）といふかみ
ねのくに そこのくににいぶきはなちてむ かくいぶきはなちてば
ねのくにそこのくににいます
はやさすらひめ（速佐須良比売）といふかみ
もちさすらひうしなひてむ かくさすらひうしなひてば
けふよりはじめて つみというつみはあらじと
はらくたまひきよめたまふことをきこせしめせと
かしこみかしこみまをす
かしこみかしこみまをす
（祓戸大神四神のうち、瀬織津姫はその代表格）

瀬織津姫は、縄文の時代から日本、大和にいた水、川、滝、桜の女神であり、龍神、さらには祓い清めの神であつた。しかし、伊勢の地に天照大神という女神を天皇家の皇祖神とするため、その名が次々に消されていったという。（『瀬織津姫物語』一二三頁）

瀬織津姫を祭る神社は、水神、川神、滝神、竜神系の神社を中心として、全国に約四〇〇あるという。例えば、弁財天は七福神の中の唯一の女神だが、元はインドのサラスワティという河の女神であり、瀬織津姫。市杵嶋姫（イチキシマヒメ、広島、宮島）も瀬織津姫。大阪市中央区淡路町の御霊（ごりょう）神社、難波・生国魂（いくたま）神社も瀬織津姫を祀っている。（『瀬織津姫物語』一一一頁）

Ⅲ 鳴尾の形成、語源、鳴尾の松、岡太神社、西宮神社

文献

西宮市鳴尾区財産管理委員会『鳴尾村誌』二〇〇五年

魚澄惣五郎編『西宮市史 第一巻』一九五九年

A 形成

土地としての鳴尾の誕生に関しては、長期的には地球の温暖化・寒冷化や土地の隆起、河川による土砂の堆積などを考慮する必要がある。西宮のシンボル、標高三〇九メートルの甲山も、そこから海生珪藻の化石が発見され、かつてそこが海底にあつたことが知られている。

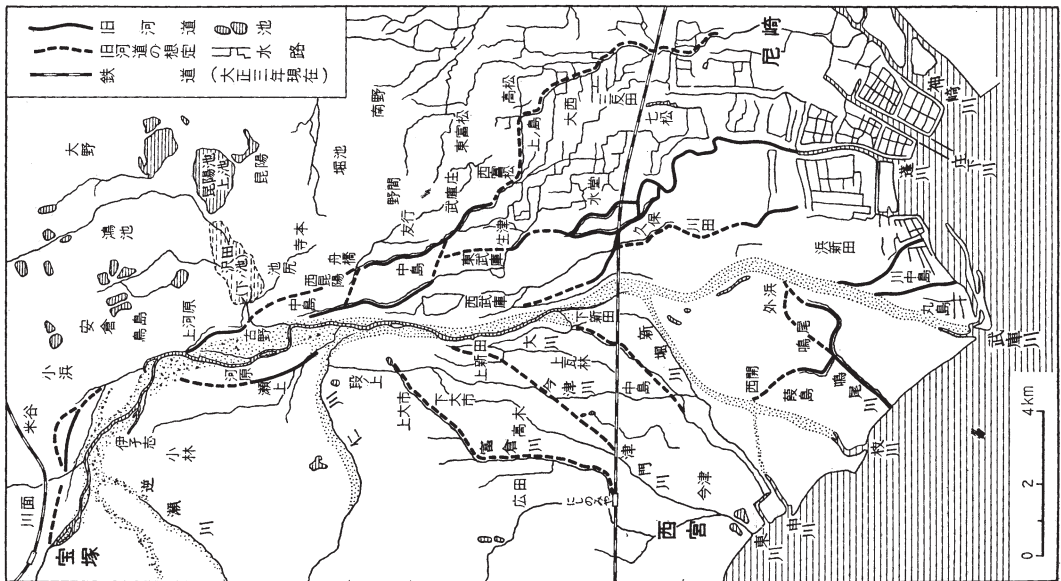
六〇〇〇年前、鳴尾は深さ二一四メートルの海底にあり、縄文時代の海岸線は国道二号線付近であつた。その後、海岸線は、五〇〇〇年前にＪＲ神戸線の少し南まで、三〇〇〇年前に甲子園四番町付近まで、二〇〇〇年前に旧国道の南側まで、そして一〇〇〇年前に臨港線付近までとなった、と推定されている。（足立年樹「鳴尾の土地の形成」『鳴尾村誌』七八―七九頁）

六甲山地を構成する花崗岩類は風化作用が著しく、急な流れを特徴とする武庫川は、大量の土砂を下流部に運搬しそこにデルタを形成した。かつて武庫川は甲武橋付近で海に注いでいたと思われ、常盤町・平松町付近は内湾性の目が住むような環境であつた。武庫川は、こうして形成されたデルタの上を網の目状に、しばしば流路を変えながら流れていたと推定される。それを正確に復元することは難しいが、かつての武庫川の主流は、現在よりも東よりの尼崎にあつたと思われる。（『西宮市史』三〇九頁）

「少しずつ堆積した砂礫は砂地を形成し、海へ向かつて広がっていった。上古の海

岸線は現在より約三キロ北方の国道二号付近にあり、しだいに南下したようである。その名残なのか、阪神電鉄本線以北には、昭和四一年の地名改正まで、入り江（小曾根町）、北浦（甲子園四番町）、浜ノ内（里中町）といった、海辺や海岸を彷彿させる地名（字名）が残っていた。のちに見るように、十世紀初頭に岡太神社の創建とともににはじまったと伝えられる小松町近辺の初期開拓集落は『浜村』と名づけられたという。最古の定住の時代から、鳴尾における人々の生産活動はおそらく小規模な半農半漁的形態だったと想像される。

また、現在の小松町のあたりは、いにしえには『小松崎』とよばれていた。」（『鳴尾村誌』三五頁）（なお、小曾根町の「そね」という地名は、古語辞典によると「石混じりのやせた土地」を意味する。）



『西宮市史第一巻』より

「昭和四九年九月二十日、明和病院（上鳴尾町）の南を東西に走る道路の下水工事現場において、地下四・五メートルのあたりから貝塚が発見された。砂地の中の1カ所、一メートル立方ほどが赤貝の貝殻でかたまり、そのなかに須恵器、土器、瓦器、瓦器片、さらに一端が焼けて黒くなった木片や芦の茎のようなものが、貝殻に混じっていた。―中略―この遺跡は平安時代後期か鎌倉時代の頃のもので、漁労をいとなんだ人々の生活の跡ではないか、と推定している。」（『鳴尾村誌』三五頁）

歴史的に見ても武庫川は「暴れ川」であり、一四七五年、一五五七年、一六五九年、一七一二年、一七四〇年と、ほぼ百年ごとに大洪水に見舞われている。（一八〇〇年代に入るとほぼ十年ごとに洪水の記録がある。）そのうち一五五七年の豪雨では、堤防決壊により「枝川分流する」とあり、一六五九年の大洪水では「小曽根村付近の堤防が決壊、小曽根、小松、鳴尾に大被害。洪水の土砂により地域面積が倍になる。全村荒地となり、西方寺本堂は流出」と記されている。（『鳴尾村誌』年表。なお、高潮被害の記録も多い。）

「大阪湾に面する摂津国の海岸部には、もともと海人（海部、あま）とよばれた漁民が広範に分布していた。西宮に隣接する尼崎の地名起源は『海人崎』（あまがさき）であるという。尼崎の大物浦（だいもつのうら）から約二〇キロ西の和田岬（神戸市兵庫区）までの海岸は『灘目（なだめ）』とよばれ、沿岸の人々は古代から漁業によつて生活をいとなんでいた。」（『鳴尾村誌』六七頁）

B 語源

鳴尾は本来、「なるを」であり、それは「なる」と「を」からなる。古語辞典によると前者は「成る」あるいは「鳴る」を意味し、後者は「尾」すなわち山の裾から伸びたところを意味する。この地が武庫川の河口に位置し、六甲山から運ばれた土砂の堆積によつてできた土地の先端であることを意味するとすれば「成尾」が相応しいであろう。しかし海鳴りの聞こえる場所という視点に立てば、むしろ鳴尾の方が適切かもしれない。

地名「鳴尾」の文献上の初見は、平安時代の半ば（一〇〇五年）に詠まれた藤原高遠（たかとう）の『大弐（だいに）高遠集』である。

思ふこと　なるをにとまる　ふなびとは　人なみなみに　あらざらめやも

C 和歌に詠まれた鳴尾

「なるを」に「鳴尾」の二字をあてた初見としては、源師時（みなもとのもろと）の日記『長秋記（ちようしゅうき）』の一一一九年九月四日条および一二三四年九月一二日条である。前者は、広田杜参詣の時、船で鳴尾を回る予定が天候のため陸路に変更したこと、そして後者は塩湯のため鳴尾庄に向かったと記されている。「なるを」に「成尾」の二字を当てたものとしては、摂津名所大絵図、一七四八年がある。

この頃から、「なるを」を「摂津の国の歌枕」として詠む和歌が登場する。一〇九七年、源俊頼（みなもとのとしより）の歌『散木弁（さんぼくき）歌集』

羨まし　なるをにたてる　松ならば　波かけぬ間も　あらましものを

訳、なんと羨ましいことか。私は父を喪つて悲嘆の涙に濡れ、乾く間もない。波のかからぬ時もある鳴尾の松であつたらば、泣かないときもあるであろうに。

「秋の寂しい情趣を表す枕詞」としての鳴尾

藤原俊頼『散木弁（さんぼくき）歌集』

なるをなる　友なき松の　つれづれと　独りもくれに　立てりけるかな

藤原定家の嫡男・為家の一首　『夫木（ふぼく）集』

わが袖の　海と鳴尾は　津の国の　ながすなみだの　つもるなりけり

訳、私の流す涙は海となつてつもるほどだ。武庫川の流すなみだのつもるところが鳴尾であるという認識。

やや寒く　なる尾の里の　秋風に　波かけ衣　うたぬ日はなし

西行『山家集』

つねよりも　秋に鳴尾の　松風は　わきて身にしむ　ここちこそすれ

源頼政『源三位頼政集』

浦つたひ　鳴尾の松の　影にきて　また隈もなき　月をみるかな

D 謡曲の鳴尾

世阿弥「高砂」の鳴尾

高砂や この浦船に帆をあげて この浦船に帆をあげて
月もろともに出で潮の 波の淡路の島影や 遠く鳴尾の沖過ぎて
はや住の江に着きにけり はや住の江に着きにけり

訳、高砂の浦から、この船の帆をあげて、月の出とともに出航し淡路島の島影を見て、鳴尾の沖を過ぎると、早くも住の江に到着した。

（相生の松によって夫婦の和合と長寿、ひいては和歌の道の繁栄と国家安泰を寿（ことほ）ぐ、めでたい曲。）

世阿弥「忠度（ただのり）」の鳴尾渦

冒頭の旅僧（ワキ）の上げ歌

蘆の葉分けの風の音 蘆の葉分けの風の音
聞かじとするに憂き事の 捨つる身までも有馬山
隠れかねたる世の中の 憂きに心はあだ夢の
覚むる枕に鐘遠き 難波はあとに鳴尾渦
沖波遠き小舟かな 沖波遠き小舟かな

（旅僧はかつて藤原俊成の家人であった。そして西国行脚の途中、須磨の浦の一ノ谷で討ち死にした薩摩守忠度の亡霊に出会う。亡霊は、俊成が選者をつとめた『千載和歌集』に載った歌が「詠み人知らず」とされたことを恨み嘆く。）（『鳴尾村誌』六一―六二頁）

訳、蘆の葉を分けて過ぎる風の音は、聞くまいとするのに耳に入り、世の憂きことどももまた、すでに世を捨てた身にまでも伝わってくる。有馬山を通り過ぎる。とかくのがれにくいこの世の中、そのつらさにあだし心は起こり、はかない仮寝の夢の覚めた枕に遠く聞こえるのは難波四天王寺の鐘の音。旅を続けて難波は後方になり、ここは鳴尾渦。沖のかた遠く小舟が波に見える。沖のかなたの波に、遠く小舟が浮かんでいるのが見える。

E 鳴尾の松

「白砂青松（はくしやせいしょう）」の鳴尾

武庫川が運んだ花崗岩の白い砂礫が作る白い砂浜と、松並木の緑のコントラスト。日本人好みの景勝地。

「一本松」あるいは「霞の松」

慈円『拾玉集』

わが身こそ 鳴尾に立てる 一つ松 よくもあしくも 亦たぐひなし
(鳴尾の一本松の孤高性を示す。)

海陸双方の旅人のランドマークとして注目された。

現在、里中町二丁目の阪神電鉄本線に近い住宅地の一角に「一本松公園」があり、そこに五代目の一本松が立っている。(『鳴尾村誌』六五頁)

元来、松は四季を通じて常緑で変色せず、しかも痩せた荒れ地に育つ。永遠の命を謳歌する縁起の良い神木として畏敬の念を集めた。また、能舞台の松は、「影向(ようこう)の松」と呼ばれ、神の降臨を待つ。(『鳴尾村誌』五五、五九、六一頁)

鳴尾、鳴尾の松を詠んだ主要な和歌

あすよりも恋しくなれば鳴尾なる松のねごとと思ひおこさむ

源俊頼(散木弃歌集)

逢ふ事はよそになるをの沖つ浪うきてみるめのよるべだになし

親意法師(新後選集)

有るべしと思ひ鳴尾の一つ松たぐひなくこそ悲しかりけれ

(清輔朝臣集)

生駒山よそになるをの沖に出でて目にもかからぬ峰の雨雲

源家長(統古今集)

いにしへにかへす鳴尾のひとつ松ことの葉茂る種となるらん

村田嘉言

浦浦をつとふなるをのまつかげにくまなくすめる月をみるかな

(為仲集)

浦さびて哀れなるをの泊かな松風さえて千鳥なくなり

隆西法師(統古今集)

浦波も秋となる尾の涼しさや遠き都の人をまつ風

野田忠爾

興つ風雪ふきかけて白妙になるおの松は葉かへしてけり

四条(藤原百首)

沖つ浪寄する響を残しても浦に鳴尾の松風ぞ吹く

権中納言為重(新後拾遺集)

陰高くなる尾のうらの一つ松いつの子の日に海土は植ゑけん

中村良臣

君がよはなるをのうらになみたてる松のちとせぞ数にあつめん
(増基法師集)

君が代ははるかなるをの松なれやひさしかるべきためしと思へば
前近江守為季

今日こそは都のかたの山の端も見えずなるをの沖に出でぬれ
権大納言実家(千載集)

けふよりは冬になるをのうらさえてはげしかるべきおきつしほ風
雅経(明日香井集)

さらてたにひさしく見えし一本のなるおの松に雪降りにけり
中務宗尊親王(文応二三百首)

しほかぜはなるをの松におとずれてわだのいりえにやどるつきかぜ
仁和寺入道二品親王

高砂の遠くなる尾とうたひ初めしむかしを松の知らば問はまじ
加茂季鷹

年もへぬ何をか今はかくて身に老となるをのまつことにせむ
前大納言為世(統千載集)

友と見よ鳴尾に立てる一つ松よなよな我もさて過ぐる身を
藤原良経(秋篠月清集)

ふりにけるむかしを忍ぶしをりとも鳴尾の浦のひとつ松かな
稻室足穂

吹く風の鳴尾にたてるひとつ松寂しくもあるか友なしにして
中務卿宗尊親王

郭公きなくなるをのひとつまつ声のたぐひもあらじとぞ思ふ
覚性法親王(出観集)

世の中はいかになるをの松ならむいたすらならぬ春にあはばや
慈円(拾玉集)

四方に名も高く鳴尾の一つ松雲の上まで生ひのぼりけり
大国隆正
(『鳴尾村誌』六〇頁)

F 岡太神社

鳴尾における最古の神社である岡太神社は、武庫川堤にほど近い小松南町二丁目の旧国道(中国道)沿いにあり、「延喜式」神名帳にその名を記された式内社である(神戸女学院大学構内の岡田神社を式内社とする説もある)。その創建にまつわる社伝に次のように述べられている。

「寛平五年(八九三年)、武庫郡広田村の岡司新吾が当地にきて耕作に従事したが、大風と大雨が多く、ややもすれば潮が田におよんで作物が熟さなかった。新吾は寛平九年にいったん広田郷にもどり、高熊原(たかくまはら、上ヶ原)から薪を背負って広田の社殿で疲れて居眠りしていると、夢に翁が現われ、『武庫の浜で耕作して五穀が実らないのは、天の二十八宿の運行が不順だからだ。あの土地で祈願すれば、天候は温和となり作物も実る』と告げた。新吾はこれこそ広田社の神託であると志を發し、昌泰(しょうたい)三年(九〇〇年)冬にかの地にもどり、延喜元年(九〇一年)春、天御中主大神(あめのみなかぬしのおおかみ)を祀る社を建て、広田の五座を勧請した。以後、風雨の害は去り、米穀も実った。村は浜村と名づけられ、社は岡司氏にちなんで岡司宮(おかしのみや)と俗称された。」(『鳴尾村誌』四七頁、岡司神社古記の意訳)。

この神社に「一時上臈(いつときじょうろう)」と呼ばれる例祭がある。毎年十月一日に行われるこの例祭では、やはり「一時上臈」と呼ばれる男女の人形の御幣が作られ、神前に供される。それは、遠い時代に存在したかも知れない「人身御供」が神事として伝えられたのではないか、と言われている。

「岩見重太郎の狒狒退治」伝説

「その昔、岡太神社の森に狒狒が住んでいた。狒狒は体躯が大きく、獯猛な性質で村人に無理難題をもちかけて困らせていた。『私の好物を持つてこい』『お前の家の宝物を持つてこい』。言うことをきかないと、狒狒は村人の家を壊し、作物を荒らした。狒狒はとうとう『毎年一人ずつ、かわいい娘を連れてこい。どの家の娘にするか、わしが家の屋根に白羽の矢を立ててやる』と言い出した。村人たちは、わが家の屋根に白羽の矢が立たないように、怯えながら祈るしかなく術がなかった。ある年、岩見重太郎という武芸者が村を通りかかった。村人の訴えを聞いた重太郎は、『嘆かずとも良い。わしが身代わりになってやろう』と申し出た。その年に白羽が立った家の娘を神社の森につれていかねばならない晩、重太郎は娘の着物を着て化粧し、娘になりすまして長持ちの中に入った。待ちかねた狒狒が届けられた長持ちの蓋を開けると、太刀を振りかざした女装の重太郎が躍り出て、みごと狒狒を討ち果たしてしまった。」(『鳴尾村誌』五三頁)

この「狒狒退治」伝説は、大阪市の住吉神社の「一夜官女(いちやかんじょ)」と同じ内容の伝説である。また、このような「人身御供」の伝説は、記紀神話のヤマタノオロチ伝説にも通じるものである。川の氾濫をはじめとする自然の猛威をなだめ、五穀豊穰を祈願する農耕儀礼の一種と考えられる。

「行宮(かりのみや)」

七世紀初頭に有馬温泉が発見されると、舒明・孝徳天皇の行幸が行われ、武庫川沿いの要所に行宮が設けられたという。その所在地に鳴尾説もあるが、有力な説で

はない。

G 西宮神社 ― 恵比寿神の総本社

商売繁盛・海運・漁業の神として広く信仰を集める。

「西宮神社は、平安時代まで広田社の摂社（南宮）だった。『延喜式』神名帳には大国主西神社（祭神 大国主命）と記載されていた。それゆえ、この「西」という名のついた神社が「西宮」の地名の起源であるといわれる。」（『鳴尾村誌』七〇頁）

伝説

「むかし、鳴尾浦の漁師が沖で網を引いていたとき、いつもの魚より重いものが掛かったので引き上げてみると、それは黒い神像のようなものだった。漁師はこれを網から外して海へ戻し、漁をつづけた。舟が和田岬の沖合にさしかかったとき、また網に掛かったものがあるので引き上げると、先刻鳴尾の沖で海へ戻したものと同じ黒い神像であった。『これはただことではないぞ』と漁師は驚き、舟に乗せてもつて帰り鳴尾の自分の家にこれを祀った。ある夜、夢に神像が現れ、『わしはお前が拾った蛭児神（ひるこのかみ）だ。諸国を回ってここまで来たが、この少し西によい宮地があるから、わたしをそこに祀れ』と告げた。漁師はさつそく村の衆にこの話を告げ、同意を得て、神像を神輿に乗せて鳴尾の西方の御前の浜へ運んだ。お社を建てて神様が鎮座された場所が現在の西宮えびす神社である。」（六九―七〇頁）

記紀神話によると蛭子は、イザナギ・イザナミ両神から最初に生まれた子であるが、流されて神にはなれなかった。『神皇正統記』に「蛭子トハ西宮ノ大明神夷三郎殿是也」とあるように、蛭子神＝夷神とみなされるようになったのは鎌倉時代以降である。

「この頃から南宮はしだいに広田社から分離独立し、また社域に別々に祀られていた事代主命（ことしろぬしのみこと、三郎殿）を祀った三郎社と夷社が混同されて、『夷三郎殿』という俗称の夷神として庶民から信仰されるようになった。もとは脇役にすぎなかった夷神が主神となり、主神だった大国主命は同じ七福神の大黒天に変容して夷神に主座を譲る、という経緯をたどった。この変遷は、おそらく鎌倉・室町の頃から西宮が商業地・宿場町として急速に発展したことと関係があらう。

庶民にとって『エベツさん』はありがたい福の神だが、夷神信仰の始源に漁民が海から蛭子神を拾い上げたという鳴尾の伝承を置いてみると、鳴尾を含むにしえの西宮地方が海人の里であったことがよみがえる。風折烏帽子（かざおりえぼし）をかぶり福々しい笑顔で鯛を釣り上げる図像で有名なエベツさんは、海の向こうからやって来た神様であり、漁民や船人の信仰の対象だったのである。」（七〇―七一頁）

Ⅳ シンボルとしての水、川

A 鴨長明『方丈記』

文献

遠藤・池垣『注解 日本文学史』中央図書、一九六〇年

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。
よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく
とどまりたる例（ためし）なし。
世の中にある人と栖（すみか）と、またかくのごとし。

うたかた＝水泡

しずかなる暁、……みずから心に問ひていはく。世を遁れて
山林に交はるは、心を修めて道を行はむとなり。しかるを、汝、
すがたは聖人（ひじり）にて、心は濁りに染（し）めり。栖は
すなはち浄明居士（じょうみんこじ）の跡をけがせりといへども、
（隠棲の草庵は維摩（ゆいま）の方丈になぞらえていながら）
保つところは、わずかに周利槃特（しゆりはんどく）が行ひにだに
及ばず。若しこれ、貧賤の報ひのみづからなやますか。はたまた、
盲信のいたりて狂せりか。そのとき、心更に答ふる事なし。只、
かたはらに舌根をやとひて、不請（ふしょう）の阿弥陀仏、両三遍
申してやみぬ。

周利槃特＝釈迦の弟子の中で最も愚かな、怠け者の周利や槃特
不請の＝お出でを願えない

B 神道の水、山、川、滝、祓い・浄め、神

文献

葉室頼昭『神道のこころ』春秋社、一九九七年

葉室頼昭『神道と日本人』春秋社、一九九九年

著者紹介

昭和二年生。昭和二八年大阪大学医学部卒業。昭和三〇年大阪大学医学部助手。
昭和三三年医学博士。昭和三八年大阪市大野外科病院長。昭和四三年葉室形成外科

病院開業。平成三年神職階位・明階取得。平成四年枚岡神社宮司。平成六年春日大社宮司。平成一一年階位・浄階、神職身分一級を授けらる。平成二〇年春日大社長老。平成二二年逝去。

「昔の日本人というのは、今の人間と違って、神仏はじめ、霊的なものに対してものすごく感受性が強い民族だったと思います。そのなかでもとくに感受性の強い人が、神さまがいらっしゃる清らかな場所というものを知っていた。ですから、どこにでも神さまを祀ったらいいではなくて、ここに神さまがいらっしゃる、神さまをお祀りできる聖域というものを直感的にわかる人がいたのでしょう。だから、もちろんここ春日大社もそういう人によって発見された場所だと思います。

ところで人間が生きるためには水がなければいけない。水は命の根源です。ですから、最高の水が湧く場所も直感的に知っていたと思われます。大きな神社の井戸を調べると、そのほとんどがゼロウオーターという清らかな水であると言う研究をした人がいます。これは科学のない時代に、神聖なところを直感で知っていたということの証でしょう。」（『神道と日本人』一二―一三頁）

「山がなかったら人間は生きていけない。なぜなら山がなくて大平原だったら、川ができないから砂漠になってしまう。ところが、日本の国というのは、ありがたいことに日本列島の真ん中は全部山になっています。そして、日本海と太平洋の両側に向かってたくさんの川が走っています。

降った雨の水というのは、山があつて、山に生えている木があるから、そこからしみ込んで土の中に深く入るでしょう。そうやって、木に覆われた山によって水が保たれ、やがて徐々にそれが川に清水となつて出てくる。木が生えていたらそこに葉っぱがあるから、その葉っぱを通して地面に入り込んで、それが清水となつて出てくるから、水にミネラルなどいろんなものが溶け込んで非常に栄養のある水になるわけですね。」（同上、一四頁）

「そもそも私たちは水の中から生まれてきたでしょう。生物は、水の中で誕生し、それが海水を体内に蓄えたまま地上に上がってきたために、人間の体の体液というのは、海水と非常によく似た成分で構成されています。だいたい、私たちの体の六〇、七〇％は水だと言われているほどです。」（同上、一五頁）

「日本はありがたいことに雨が多い、緑が多い、山が真ん中にある。世界でこんな快適な国はない。山がなかったら我々は生きていけない。そのおかげで我々は生かされているということを知ることができたので、昔から日本人は自然を拝み、必ず山に神さまを祀ってきたわけです。それがいい水が出てくる場所を知ることにつながりました。」（同上、一七頁）

「山は火山の爆発など、地球内部のエネルギーが吹き出してきて盛り上がったと

ころにあります。そのはかりしれない力強さに、また山は生活に欠くことのできな
い水を生みだす生命の原点の場所ですから、そのすばらしい生命力に、日本人は山
に神を祀り拜んできたのだと思います。」（同上、一八頁）

「神道に修行がないというと、神主は生臭で何もしないのかと思う人がいますけ
れど、それは全然ちがいます。神道では水のなかに入って禊ぎをします。ただし、
それは修行ではない。修行というのは座禪を組んだり、自分の努力で無我になろう
というのが修行です。神道は神の恵みと祖先の恩で生かされているというのが根本
なんです。ですから水の力、神の力によつて自分の罪・穢を取つていただくという
のが禊ぎです。自分の力、自力でやろうとするのとは違う。よく滝に打たれて大
声で経文を唱えて、一生懸命無我になろうとしている人がありますが、あれは修行
です。」（『神道のこころ』一三八―一三九頁）

「昔から日本には『うがい手水に身を淨め』というように、水によつて体を淨め
るという考えがあります。ですから、神社に参拝する時は、手水をして心身を淨め
たり、あるいは、神職は春日でのお祭りの時は、朝、潔斎所（けっさいじょ）で禊
ぎして身を淨めてお祭りを奉仕します。」中略

水は水素原子二つと酸素原子一つから成ると学校では教わりますが、これが水だ
と考えると、とんでもない間違いで、水というのはそんなに単純なものではありま
せん。水というのは記号で表し切れない、すごい性質、力を持っています。例えば
水は、常温では液体ですけど、それを地球上で百度まで熱すると気体になります。
また零度以下に冷やすと固体にもなる。どこにこんな性質を持った物質があります
か。これを皆さんごく当たり前のことに思うけれど、これは非常に不思議な性質な
んですね。液体になって、そして水蒸気になって上がっていく、また雨になって戻
ってくる。で、これがまた水蒸気となって上がっていくという、循環する不思議な
力を持っている。

また、普段は穏やかですけど、一度怒ると海の水は荒波となり、全てのものを
飲み込んでしまう。川の水でも普段ゆるやかに流れていますが、これが洪水にな
ると、全てのものを押し流すという、そういう力を秘めているわけで、どここのそん
な力があるのか不思議なくらいです。

また、水というのは非常に素直であり、どんな器に入れてもどんな形にでもなる。
どんな隅にも入っていく。どんな色にも染まる。それからどんなものでもなかに包
んでしまうという、包容力といいますか、ふところの深さという性格をもあわせ持
っているわけです。ところが、例えば泥水というと水が濁っているんだ、泥水にな
ったんだと思われるかもしれませんが、あれは決して水が変質したわけではあませ
んね。それが証拠に濁った水をそのままにしておくとだんだん泥が沈殿して、透明
な水が現れてくる。そうすると、水というのは、どんな形にもなる、どんな色にも
染まる、どんなものでも受け入れる、だけど水そのものの本質は絶対に変えないと

ということがわかります。」（同上、一三九―一四一頁）

「その水の力によつて罪・穢を祓い去るんです。『つみ』『けがれ』というのは、いつもいつているように、『つみ』というのは人を殺したとか、そういう罪とは違います。人間の本当のすばらしい本体を包んでしまうようなものということです。これは、『つみ』＝『包（む）身』、身を包んで、神さまのお姿を包んで隠してしまうものということなんです。『けがれ』というのも、汚いという意味とは違います。神さまからいただいたエネルギー『気』を枯らしてしまうものという意味が、『けがれ』＝『気枯れ』です。人間の素晴らしい神さまからいただいた身を包んでしまうもの、尊い神さまの気を枯らしてしまうようなものを身につけていると、病気になるったり不幸になるたりするわけです。それを水の力によつて祓う。これが神道の儀式で『祓い』ということです。水にはそれだけのすごい力があるのです。――中略――

祓いといえば、僕は神職にも考え違いしているんじゃないかとよく言うんですが、お祭りの前に神職が大麻（おおぬさ）という細長い紙きれのついた棒を左右に振りますでしょう。あれはお祓いをしているんですが、その奉仕している神職は『みんなを祓っている』と思っているかもしれないけれど、違うんですね。それはとんでもない話で、あれは『神が人を祓われている』のですね。神さまというのは、ものすごいお力を発揮され、みんなにお恵みを与えようとしていらつしやる。その時、お恵みを枯らすような体であつたならば、穢れた体では、せつかくのお恵みが死んでしまいます。それで必ず神さまは皆さんにお恵みを与えるために、罪・穢を祓うんです。人間が祓っているんじゃないやありません。」（同上、一四四頁）

「言葉で祓うとはどういうことか」といって、言葉の解釈を知らなければいけないけれども、結論から言えば最高に良い言葉、つまり神に通じる言葉を唱えたら、言葉の力によつて罪・穢が除かれるというものです。

祝詞は昔からたくさんあるけれども、日本でいま残っている最も古い祝詞を『延喜式祝詞』といいます。そのなかの一つに大祓の祝詞があるんです。これだけが千何百年の時空を超えて、いまも伝わっている。日本全国の神社でいまも大祓の祝詞をあげています。ということは大祓の祝詞が本当の言葉だということです。祝詞というと、いまは人間が神さまに『かけまくも（かしこ）畏き・・・』といつて、こういうことをお願いいたしますというのが祝詞だと思われていますね。しかし本来の『のりと』の『のる』は『宣る』、神さまが言われるということです。神さまが宣るんです。最初は神さまのお言葉を神主が伝えているのが祝詞だった。大祓祝詞は神の言葉なんです。

藤原氏は、昔中臣氏といつて、宮中のまつりごとをつかさどっていた氏族なんですね。そのなかの誰かが神の言葉を聞いたわけでしょう。それを記したのが大祓の祝詞なんです。本当の神の言葉だから千何百年続いている。――中略――

九百字ほどの漢字で書かれています。だけど漢字は、本来の神の言葉に当てはめただけの当て字ですから、いくら漢字を解釈しても大祓の祝詞の本当の意味はわかりません。だから漢字の意味を考えないでそのまま読みなさい。意味がわからなくてもいいから読みなさい。それは神さまの言葉なんだから、それを口にすれば罪・穢が祓われますよと、皆さんに言うのだけれど、なんでも理屈で解釈しようとする人が多く、言ってもすぐ大祓の意味はなんですかと聞かれます。なかなかわかってもらえません。」（同上、一四六―一四七頁）

「もともとの人間の体はすばらしいんです。ただ、それをおおい隠すようなものがつくからダメになるというわけです。

それがなぜつくかという、すべて『我』です。罪・穢は全部『我』によっておこってくるのです。我欲があるから、いわゆる病気になるったり、いろいろ悩み、悲しみが出てくるのです。だから、我欲を祓いなさいというのが『祓い』ということです。」（『神道と日本人』二二頁）

文献

小堀桂一郎『なぜ日本人は神社にお参りするのか』海竜社、二〇〇九年

小堀桂一郎は、本居宣長の「カミ」についての叙述を、上記の著書の第一章において、次のような現代文に直して紹介している。

「さておよそ『カミ』といふ詞は、記紀をはじめとする我国の古典に出てくる天地間の諸々の神達を謂ふことから始めて、その神々を祀（まつ）つてゐる神社のご本殿に鎮座する『みたま』を指して謂ふ場合もある。又人間はもちろんだが、動物では鳥獸、植物では草木の類、又海とか山とかいった自然物、その他何でもよいのだが、何か尋常ならざる（すぐれた）力をそなへてゐて、それに対して恐れ畏（かしこ）まざるを得ない様な対象を我々は『カミ』と呼んでゐるのである。」（一四頁）

「キリスト教文化圏の民から見ますと、唯一最高の造物主であるデウス以外に、人間がその前に畏れ、慎まなくてはならないやうな超越者などといふものはないはずであると考へます。彼らから見れば、日本人の崇める自然の諸々の事物は所詮、造物主がつくつたものではないか。有名な『創世記』を見ればわかりますけれども、太陽も、月も、大地も、海も、所詮はデウスの被造物なのです。つくりものであります。人間も被造物の一種です。ただし人間は、その造物主デウスの創造の業の六日目の仕上げの段階で生まれたものであり、造物主が自分の姿に似せてつくつた。そこで、その出来ばえに大いに満足を表明したといふ、さういふ特別の存在なのです。

したがって、それに順位をつけますと、人間の方が山や川や森や泉よりも被造物としては造物主の地位に近い。つまり、順位が上なのです。人間が自然の事物を崇

めるといふのは、キリスト教的な宇宙秩序から見ますと本末転倒で、教義的には、この態度は誤りであると言つてよろしいのです。そういふわけですから、キリスト教は自然崇拜は認めません。日本人の自然崇拜の心情も行動もキリスト教のやうな『高等』宗教から見ると、所詮、無知にして未開の異教徒の仕業であるとしか考へないのであります。」（一七二—一七三頁）

「第一章に引いた本居宣長の神の定義の少し先を引いて言えば、〈凡ての人の智は限りありて、まことの理（ことわり）はえしらぬものなれば、かにかくに神のうへは、みだりに測（はか）り論（あげつら）ふべきものにあらず。・・・ただ其の尊きをたふとみ、可畏（かしこ）きを畏（かしこ）みてぞあるべき〉といふのが古代日本人の、自然を神と観した崇敬の感情を的確に言ひ当ててゐるのでありませう。

話が少し理論的方向に走るのですが、この〈尊（たふとき）を尊（たふと）み、畏（かしこ）きを畏（かしこ）む〉といふ心性こそが、実は凡そ人間の宗教心といふものの原形質なのです。『宗教』といふ単語が西欧近代語（英・独・仏等）でみな religion という綴になつてゐることは誰方も御存じでせう。この綴はラテン語の religio に由来するものなのですが、ではその religio とは何かと申しますと、つまりこのラテン語の原義はどういふ意味なのかをとふことになります。説はいくつかに分かれ、その代表的な一つは『結びつける』の意だといふのであります。いと高き聖なるものと凡俗の人間とを結びつける関係性が即ち宗教的信心だといふことになりませう。然し私は他の一つの説であるローマの文人キケロの解釈をとりたいと考へてゐます。キケロによりますと、これは古代ローマ人における彼等の神々に対する態度を定義したもので、意味から言へば『畏（おそ）れ』『慎（つつし）み』であります。ローマ人の精神文化の重要な部分の源流は古典古代のギリシヤ人にあるのですが、同じ多神教徒のギリシヤ人も彼等の神々に対する姿勢は『畏れ』と『慎み』であることを自覚し、これをエウラベイアーと名づけてゐました。ローマ人のレリギオ―は要するにギリシヤ人のこの概念のラテン語訳だといふのであります。

ギリシヤ人は又神々に対する畏れを欠いた人間の振舞、人間の分際を超えて神々の威厳を蔑（ないがし）ろにする様な行動をヒューブリスと呼び、これは『不遜』とか『傲慢』と訳してゐますが、これが何よりも重い罪であるとし、現世の全ての禍（わざわひ）はその人間の傲（おご）りから生ずるのだと考へました。」（四四—四五頁）

「大自然の摂理、又それを暗黙の裡（うち）に説き明してゐる神々の存在、といふことを申しましたが、それをやはり言葉の理屈を以てではなく、直感的に感じ取つた日本人の自然観が、山・海・森・泉・樹木、岩石それ自体を神と感ぜしめ、その存在に対する畏れと慎みが、日本人の対世界態度の基調となつた。その様に理解すれば、巷間（こうかん）よく論ぜられる様な日本人の精神生活の根底に宗教が無い、聖なるものへの畏敬がない、といった非難は極めて浅薄な俗見であることが

わかんと思ひます。

日本人の対世界態度の根底には、元来大自然とそこに働く摂理に対しての畏れと慎みが伏在してをりました。十九世紀の半ばに欧米から功利主義的技術偏重の文明開化観が流入して日本人の価値観もそれに強い影響を受けたことは否定できません。欧米的価値観の底にあったのは、この世界の天然資源の全ては人間の利便に供されんがために存在する、人間は自然を己が生活の快適と便利のために如何様（いかよう）にも利用し消費する権利を造物主から興へられてゐるのである——といった、正に畏れを知らぬ人間中心主義のキリスト教的世界解釈であります。

人間の便利のために天然資源の恣（ほしいまま）なる収奪を許す、といった価値観は、しかしやがては人間にはね返つてきて文明の衰亡を惹起（ひきおこ）すことになります。そのことを戒めた自然の警告が、人間による環境破壊の禍といふ形で眼に映る様になった時、日本人はそれに気付き、その警告に耳傾ける姿勢に転じることが国際社会の中でも比較的早かつた様に思ひます。それはやはり、日本人の民族的遺伝子の中に潜んでゐた、大自然といふ神々に相對しての畏れと慎みの心性から出たことではなかつたでせうか。」（四六一—四七頁）

「たとへば、植物を生育させる太陽の光と熱、大地を潤して植物の根を養つてくれる雨、雨を降らせる雨雲の発生と消失、あるいは、木や家を吹き倒すこともありまされども、しかし風がなかつたら人間が夏の暑さに耐へられない、さういふ風の力にしてもいったい何ものがかうした自然の恩恵を配慮してくれるのか、思へば不思議なことです。かうした奇（くし）びの力を、人間は知つてゐるのです。

こうした気象現象だけではありません。古代の日本人は、山には山を山たらしめる神がある、森には森を森たらしめる神がある、といふ自然存在の原理ともいふべき連関を直感的に観じとつてゐました。樹木には樹木の神、泉には泉の神、岩には岩の神、川には川の神がいて、人々は考へたのであります。」（一七〇頁）

「大正十年の暮、関東大震災の起る二年前のことですが、フランスの外交官で最高級の教養を身につけた文人であるポール・クロードルが駐日フランス大使として東京に着任します。彼は昭和二年まで日本に滞在して多くの画家や文人と親しく交友関係を結び、日本人の心の世界について甚だ重要且つ的確な観察をしてそれを文字に留めてゐるのですが、その中に本書の主題と密接な関連を有する次の様な所見を述べてをります。

彼は先づ考察の前提として、〈およそ宗教の目的は全て永遠なるものとの対比の下に、精神を謙遜と沈黙の態度の中に置くことにある〉と、目的論的観点からの宗教の定義を提示します。そしてこの前提の下に、〈日本人の心の伝統的な性格は、先づ崇敬の気持であり、敬ふべき存在を前にしては自らの個性をなるべく縮小することであり、周囲の生物や諸々のものに謙虚な注意を向けることである〉、即ち日本人の宗教は何か特定の超越的存在への崇拜ではなくて自然と国土そのものへの畏敬なのである、との発見を語るのです。この観察は、さきに著者が、日本人の自然

崇拜は、古典古代のギリシャ人、ローマ人が畏れと慎みの心性を即ち宗教だと見なしてゐた、その基準に則つて考へれば是が同様に日本人の民俗宗教なのだとの判断を述べましたが、それと同じことを言つてゐるのです。

全ての自然現象の中に神々の意志の顕現を見て取る古代日本人の古神道的世界観、一言で言つて神道は、いったい宗教なのかどうか。これは内実の乏しい割に誰もが少々頭を悩まさざるを得ない、意外な難問なのですが、クロードルの鋭敏な感性は（生粋のカトリック教徒としては珍しいことですが）見事にこの難問に答へてゐると言えませう。

クロードルは大正末期の日本人の社会に身を置いて生活してゐるうちに、日本人の魂の特質は、国土の美しい自然の前に敬虔に頭を垂れる『慎み』深さにあると見たのです。その時代の日本人はクロードルの目にはほんたうに皆慎み深い人に見えたのでせう。それが日本人の宗教性である、言ひ換へれば、日本人の道德の根源は国土の自然に向けた人々の感情の敬虔さの内にある―と、これは実に見事な観察でした。―中略―

クロードルの述べてゐる、特に御神木といふわけでもない、樹木一般に対する日本人の畏敬の念についての観察は甚だ面白いものです。彼は〈この国に生えてゐる大木は言葉では言ひ尽くせない悠遠の感覺を以て人間が悪へ走ることに對しての『ノン』（拒否）を言ふ〉と書いています。日本人は或る畏怖を覚えさせる様な自然物、例へば大木を見てゐると、それがそのまま道德の教と映る、人が悪へ走ることへの拒絶だと見える。」（四八一五〇頁）

C ヨーロッパ中世の川

文献

「ライン河に架かる橋」（阿部謹也『中世の星の下で』ちくま文庫、一九八六年）

「ライン川という名を聞くと、私たちのなかになぜか懐かしい思いが湧き起こってくる。いまだライン川の岸边に立つたことのない者でも憧れの気持をかきたてられる。〈ローレライ〉の歌の響きが幼いころの記憶のなかからよみがえってくるためだろうか。ライン川から遠くにいる日本人にとつてもこのような憧れの的であるのだから、ドイツ人にとつて父なるラインが太古の昔から常に変わらぬ故郷の象徴であり、心の慰めであつたことは不思議ではない。

ライン川は遠くスイスのアルプス山中深いトーマ湖に発し、ボーデン湖をへて、バーゼル、ストラスブール、ヴオルムス、マインツ、ケルン、デュッセルドルフと古い歴史に彩られた都市の傍らを流れ、千三百二十キロメートルに及ぶ流れののち、ロッテルダム付近で北海に注いでいる。母なるドナウに次いで長いヨーロッパの代表的な川である。

ヨーロッパの名だたる都市の間をぬって流れるライン川は古来多くの歴史的事件の舞台となり、ヨーロッパ史はライン川を抜きにしては語れないほどである。すでに多くの人がライン川について語っており、この川をめぐる文献はおびただしい数にのぼっている。多くの歴史的事件に彩られたライン川は、カール大帝をはじめとしてニコラウス・クサーヌスやエラスムスなどの歴史的人物とかかわり、ヨーロッパ文化と思想の歴史を貫く流れともなっている。しかしライン川の魅力は歴史的事件や都市、文化・思想史上の人物とのかかわりのなかにあるのではない。ライン川に触れたすべての人にとって、それは常に変わらぬ希望と慰めを与える流れであった。一二年間にわたる亡命生活ののちドイツに戻ったハイネがライン橋でライン川と再会したとき、〈これはこれは、わが父ライン、ご機嫌いかがですか。憧れと望みを以て私はいつもあなたのことを思っていました〉（井汲越次訳『ドイツ物語』）と語りかけ、父なるラインから最近のドイツの世情への忿懣を聞く。このときハイネがライン川までひきよせられたのは、ライン川が歴史的伝統に彩られた名所としての川であつたからではないだろう。河川こそ古来人間の生命の源泉であり、故郷の象徴だつたからである。

川の岸边にたたずむとき、人は心の安らぐのを感じ、俗世から隣時永遠をかいまみるかのような気持ちにさせられる。このようなとき、川との対話がはじまる。川と人間とのこのような関係をどう理解すべきだろうか。川の流れの一回性とか永遠性について、詩人や文人は多くの説明をしてくれるに違いない。―中略―

十九世紀ドイツの詩人、学者カール・ジムロークは〈われわれにとってラインは聖なる川であり、インドのガンジス川に当たるものがドイツ人のライン川なのである〉と語っている。聖なる川としてのライン川についての最古の記録を残しているのは、ほかならぬペトラルカであり、彼は枢機卿コロンナにあててヨハネ祭の日の水浴のことを伝えている。

一三三〇年ころ、ちょうど夏至の日にケルンの宿についたペトラルカはライン川で日の入りのときに行われる古来の行事をみた。〈岸边は大勢の婦人で埋められていた。私はよく見えるように丘の上にあがった。群衆の数は信じられないほどであつた。婦人たちは良い香りのする草花の蔓で身を飾り、袖をまくつて一斉に白い腕を流れのなかに入れて洗いはじめた。私にはわからない言葉で彼女たちは笑いながらたがいに声をかけあつていた。友人は私に、これがケルンでは古くからの婦人の慣習で、この年のすべての苦しみがこの日にライン川で洗い流され、それから思いどおりになると信じられていると説明してくれた。いわば浄めの年中行事で、毎年必ず守られているという。私は、ラインの幸せな住民たちは羨ましいな、と思わず言つてしまった。―中略―

ラインは父なるラインと呼ばれるように男性形(der Rhein)で示されているが、ライン流域の古来の神々の世界はもっぱら守護の女神、豊穰の女神によつて代表されている。かつて今日のケルンを中心とした地域に住んでいたウビ族の文化やローマ

・ケルト文化の影響の下にこの地で生まれた女神の伝説は、いつも宝角（ヤギの角に花や果物を入れて豊穰のしるしとしたもの）や穀物の穂束、果物籠をもった三女神として伝えられている。彼女たちは人間に恵みをもたらす友好的な女神で、家や氏族、共同体の守護神でもあった。これら三女神は「中略」子宝をさずけ、新生児をたすける力をもっている、と伝えられている。ローレライの伝説もこれらの女神や水の精を主人公とする話と考えられていたが、十六世紀ころから人文主義者が山彦の一種であろうと近代的解釈をほどこしはじめた。しかし岩の上で髪を梳り、漕ぎゆく船人を誘うローレライ伝説は、詩人のブレンターノによって新しい形で生きつづけるのである。

ライン川は古来今日にいたるまで民衆の間では聖なる川として意識されつづけてきた。川こそ都市や村に必要な水を供給し、緑野を潤し、けがれを流し、人々の生活の生命源だったからである。しかし川はときには大洪水を起こし、近隣の集落を呑みつくし、渡河しようとする人を波のなかにさらうこともある。このような川の暴力は古代から中世、近世にいたるまで水の精の仕業と考えられていた。水の精をめぐる伝説も各地の河川に今日も生きているのである。」（四九―五二頁）

文献

「川と橋」（阿部謹也『中世を旅する人びと』平凡社、一九七八年）

「河川は一二、三世紀以降、人や物の大量交通の重要な手段となつてゆくが、それまではむしろ人間と自然、神的世界との交流の重要な舞台であつた。」「中略」

集落も都市も川のほとりにつくられ、河川を生命の源泉としていた。雨は耕地に恵みを与え、草や木を緑にする。水こそ人びとの生活の源であつた。だからガンジス河、ナイル河など世界各地の河川と同じく、ヨーロッパにおいても河川は神性をもつものと考えられていた。」「中略」

すべてのものを流しさる河川は、病や不幸をも流しさる治癒力をもっていると考えられていた。患者がもつてきた小さな枝に特定の刻み目をつけて、うしろむきに川に投げ、あとをふり返らずに家に走って戻ると病が治るとされていた。歯痛のときや熱のあるときも小川に行つて口に水を含み、川にはき出すと治るといわれた。ブロホヴァイツによると古代ゲルマン人のあいだでも、家長が（家の司祭として）新生児を膝に抱き、水をそそぎ、そのときに名をつける。この儀式によつて新生児は一族の一員となるとされ、この儀式をリグス・マルとよんだ。」「中略」

しかし河川は人間に恵みを与えるだけではない。河川は両岸に住む人びとを決定的にべだて、ときに大氾濫を起こして村を襲い多くの人びとを未知の世界へさらってしまう。当時の人びとにとっては不可抗力であつたこれらの災難も水神の業と考えられ、多くの水の精が登場した。男の水の精は年をとり、醜く、陰険で人間に害

をなし、女の水の精はつねに魅惑的な美しさと、誘うような美しい声をもち、人間に恵みを与えるとされていた。水の精への信仰は多くの民話のなかにのこされており、人間と深い交流があったことを伝えている。」（二三―二五頁）

文献

「火と水と人間」（阿部謹也『甦る中世ヨーロッパ』日本エディタースクール出版部、一九八七年）

「古代以来世界を構成する四元素が数えられており、火と水、風と土がそれです。それらはいずれも大宇宙に属していたものです。カマドは大宇宙の諸力の一つである火を人間がかろうじて閉じこめた場所でしたから、家のなかでも極めてあやうい場所でした。人間はカマドを聖なる場所とし、家の中心としたのです。」中略

人間はカマドのなかに大自然の火をとりこんだとき、大宇宙の力である火に対して最大限の儀礼を営んで扱ったのです。近世に入っても嫁入りしてきた女はカマドのまわりを三回まわって初めて家の人間として承認されたし、家長は何か重大な決定をするときカマドに手をついて命令を下したといわれています。山火事などの野外の火は人間には制御しえない大宇宙の現象であって、中世の人間はそれらの火がカマドのなかの火と同じものとは考えていなかったのかもしれないのです。

同様のことは水についてもいえます。料理のために泉から汲んできた水と大洪水や暴風雨のときの人間に非常に大きな害をなす水が同じものとは考えられていなかったと思われるのです。後者はまさに大宇宙そのものの力であり、人間には制御しえない現象だったからです。ですから泉を汚さないように配慮したし、川も冥界に通ずる道と考えられていたようです。」（四三―四四頁）